

FSCN discussion paper (社会文化形成ディスカッション・ペーパー)

No.12-1 (2012年4月2日発行)

# 倫理的社會主義

## デンマーク福祉国家への一先駆思想

H・L・マーテンセン

(小池 直人 訳)



マーテンセン (*DEN STORE DANSKE*,  
Gyldendals åbne encyklopædi より)

### 名古屋大学社会文化形成研究会(FSCN)

The Association for Studies in Formation of Society and Culture  
Nagoya University

名古屋大学大学院情報科学研究科

E-mail: [nakoike@is.nagoya-u.ac.jp](mailto:nakoike@is.nagoya-u.ac.jp) Tel/Fax: +81 52 789 4840

## 訳者まえがき

H・L・マーテンセン(Hans Lassen Martensen, 1808-84)は、フレンスブルク(現ドイツ領)に生まれたデンマークの神学者であり、コペンハーゲン大学で神学教授を務めるかわら、デンマーク国教会シェラン島監督の任を果たした。彼は青年時代から、国内ではN・F・S・グルントヴィヤやJ・P・ミュンスター、国外ではヘーゲルやシュライエルマッハーらの影響を受けながら、思弁神学やキリスト教倫理学を研究した。ここに訳出した『倫理的社会主義』(原タイトルは『社会主義とキリスト教』)は宗教改革と絶対王政の成立以降、デンマーク国民教会の管轄であった救貧福祉を、産業化にともなう大規模な社会問題の解決を射程に入れて総合的に再編しようとするさいの思想とプログラムとすることができる。この短編は、公刊されてすでに一四〇年近くになるが、内容は現代的に見て古びたところがまったくなく、訳者にはむしろ、北欧社会モデルの一類型に数えられるデンマークの普遍的福祉国家に先駆する思想ではないかと思えるほどである。なお、この短編は後に、彼の『社会倫理学』の一部に編入され、『キリスト教倫理学』の一部となった。著者には他に『道德哲学体系の基礎』『ヤコブ・ベーム』など多数の著書がある。

## 凡例

- 一 ここに訳出された資料のオリジナル・テキストは、H・L・マーテンセン(Hans Lassen Martensen, 1808-84)によるデンマーク語著作 ”*Socialisme og Christendom : Et Brugstykke af specielt Etik*, Forlag af den Gyldendalske Boghandel, Kjøbenhavn, 1874 である。テキストのタイトルを文字通りに訳せば「社会主義とキリスト教——特殊倫理の一断片」となる。なお、訳出に当たっては独訳 (*Socialismus und Christenthum: Bruchflück aus speciellen Ethik*, übersetzt von Al. Michelsen, Gotha, 1875)を適宜参照した。
- 二 本文中の各節の章題は著者のものであるが、「第一章」「第二章」・・・といった章順の数は訳者が付加した。また、文中の小見出しはすべて訳者により、[ ]内はすべて訳者による補足であり、小さな[ ]は訳者による簡単な注記である。
- 三 原注は本文中に[一][二][三]・・・と漢数字で示し、テキストの末尾に一括して掲げた。また訳注は本文中に(1)(2)(3)・・・とアラビア数字で番号を付し、原注の後に一括して掲げた。

## 目次

はじめに	3
第一章 公共の福祉、生活財の分配、富と貧困	3
公共の福祉とは何か／ギリシア・ローマと奴隷制／キリスト教による世俗的解放	
第二章 国民経済学的個人主義：労働者問題	10
スミスと分業の論理／自由放任の陥穽／ルターと資本主義／労働者問題／マルサスに見る自由主義の陥穽	
第三章 ユートピア社会主義と革命的社會主義	20
モアのユートピア／様々なユートピアとその限界／革命的社會主義をめぐる諸問題／個性にたいする無理解／問われる人倫的人間観	
第四章 倫理的社會主義	28
倫理的社會主義とは何か／倫理的社會主義の綱領／ユートピアを踏み越えた社会改革／国家支援と自助努力、自己陶冶へのキリスト教の役割／人間的な機械の使い方、産業やケアのあり方	
原注および訳注	36
訳者紹介	41

## はじめに

多くの人々は社会主義をもっぱら革命的で、社会的にとって危険な方向をめざすものと見なしており、これにたいして国家は極力抵抗すべし、権力手段を用いて闘争すべしと主張する。この点がどれほど必要なものとして認識されねばならないとしても、社会主義は、その現象の全体をとらえるなら別の側面を提起している。すなわち、社会主義は我々を人類とキリスト教にとって重要な関心に立ち返らせる。我々はまさしく我々の同胞感情に目覚めることができ、また良心によって社会目標を定めるといった関心に立ち返るのである。この[反省という]点に、本冊子で以下に述べられることからの意図がある。たんに政治や国民経済だけでなくキリスト教倫理もまた、社会問題に取り組むことはおそらく無根拠ではない。公的生活において、直接的であれ間接的であれ、キリスト教と無関係な現象はなく、キリスト教と無関係に重要な意味をもつ現象はない。それゆえに、公的生活がキリスト教に理解と評価とを求めないような現象はないのである。

ここで伝達されることがらは、より大きな全体の一部という形式で示される<sup>(1)</sup>。その考察は純粹に一般性の場でなされ、[現在]闘わされている議論や交渉に直接的に介入しようとする意図をもつものではない。つまり本考察は、キリスト教の理解を根拠づけ、そのことで[キリスト教に造詣のある]読者の思考様式と折り合いをつけることができるかどうか、こうしたことに貢献しようとするだけなのである。

## 第一章 公共の福祉、生活財の分配、富と貧困

### [公共の福祉とは何か]

市民社会と一体である国家には、自由裁量で用いることのできる諸手段によって公共の福祉<sup>(1)</sup>[を実現する]という課題がある。公共の福祉とは、一般的意識によって、多かれ少なかれ倫理的に理解される概念である。しかし、その完全な概念は地上における最高善、倫理的善と物的諸財との調和ある一体性であり、労働と享受とが一体となって溶け合っている普遍的幸福の状態に他ならない。このことはたしかに、価値ある時代を示すひとつの理想であるが、しかし、国家統治者は、その目標が地上における諸条件にとらわれるという性格上、必ずしも完全には達成されなくても、それでも[公共の福祉を]努力すべき目標として思い浮かべねばならない。というのも、それはたんに、社会的諸悪や貧困、疾病、不信や不道徳による罪とのたたかいがなされ、克服されるのと同じ目標のなかで達成されるにすぎないからである。

このことがおおそ達成されるには、国家統治は全体の福祉と個人の福祉とを同

時に視野に収めなければならないだろう。国家統治は社会主義の真理と個人主義の真理とを一度に主張しなければならないだろう。個々の個人は国家にとって目標であらねばならない。個人は、最大に可能な幸福が最大に可能な多数の人間たちにたいして分配されねばならないという仕方<sup>(二)</sup>で、国家のめざすものでなければならない。個人は、全体のための手段となるにすぎない場合には自己目的とはならない。そうだが、個人が国家機構の大きな車輪に踏み砕かれるという仕方では全体の配慮がなされる場合には、公共の福祉にたいして正しく配慮がなされてはいない。しかし[これとは正反対に]、全体の権利が攻撃される仕方では国家が個人の利益を促進する場合、そのさいにはさまざまな種類の混乱が生じ、人々が主張しようとする個人の権利さえも攻撃されるのであるが、そういう場合にもまた公共の福祉にたいする意図的な配慮はなされないのである。

公共の福祉はずっと以前から物的に良好な状態に限定されていないのであり、よき生活状態<sup>(三)</sup>というたしかな目標は、人間たるに価する生存の諸条件に属している。それゆえ、公共の福祉に属するのは、社会においては所有という概念に含まれる生活のための物的財の釣り合いのとれた分配、社会における各人の地位やその人の職業活動、労働に対応する分配であり、ことばの正しい意味での「職業的地位にふさわしい」分配である。国民の福祉状態は、我々が一方における富と過剰、他方における貧困と困窮、悲惨といった両極の対立を見出す場、これら両極のあいだの、いわば口を開いた亀裂が固定された場にはない。国民の福祉状態は一国民の能力・資産<sup>(四)</sup>の量によって規定されるだけでなく、この能力・資産がどのように分配されているか、そのあり方によっても規定される。国民の福祉状態は、圧倒的に多数の国民が良好に暮らしている中間の状態、中くらいの占有という目標をもった中間状態をつくりあげる場にのみある。それゆえに、国民の福祉状態とそのための諸手段の探求を研究目的とする国民経済学には、「貧困と富とを我々に与え給うな、我々に慎しきほどのパンを与えよ」(箴言集30)とするアグール<sup>(五)</sup>の願いを心にとめる理由がある。このことはまた、かの詩人[グルントヴィ]のことばでも表現できるのだ<sup>(六)</sup>。

持ちすぎる者はほとんどおらず、  
持たなすぎる者はなおさらない  
そのとき我等は豊かな生の営みのなかにあるのだ

一国民が達成している福祉の状態は人間的な発明・創作によるだけでなく、我々をより高い摂理へ、我々にとって多様な観点からも不思議ですばらしい摂理へと連れ戻す、所与の自然的諸前提にも依存する。福祉の状態はこれら両要素の統一に依存するにすぎない。すでに地球を一瞥することでわかるのは、我々には高度に多様な自然の恵みが分配されていることだ。北極の氷に隣接するグリーンランドでは、自然の恵みがどれほど慎ましいものであることか。その恵みは南方の豊穡さのなかに花咲

き、稔りを得る地域の住民にたいしてはなんと寛厚であることか。そうした地域では人間が享樂のために招かれて、人間自身の労働なしに提供される諸々の果実を自然から受け取る必要があるにすぎないのだ。こうした相異なる[自然の恵みの]分配を、我々は所与として受けとめねばならないのであり、そのことについて我々は創造者に異議申し立てをすることもできないし、すべきでもない。しかし、人間にたいして人間の労働の課題、人間の発明の課題、技巧に長けた手の課題として与えられているものがいたるところにある。同様のことは、人類における精神的才能の分配についても当てはまる。そこでは、富者と貧者との際立った対立が示されるのである。同じことは物質的な富裕と貧困との対立にも当てはまる。その人間自身の「パン」だけではなく、[偶然の定める]浮き沈みにおいても、貧困はつねに人間社会に存在するだろう。人間の惨めさをなすものである貧困の重圧は、最終的意味においては[人間の]「罪」に連関する。こうしてその諸帰結は我々人類に浸透して、諸個人がしばしば全体が引き起こした結果である重荷に苦しまねばならないだろう。貧困がこの世界経済から切り離せないのは、病気が世界経済から切り離せないのと同様である。

しかしながら、いつの時代でも社会において病気の支配を制限しようとする努力が存在するのと同様に、貧困を制限し緩和する努力、貧富のあまりにも大きな亀裂を埋めて均す努力もまた存在する。そして我々が、人間はその器用さと労働によってと富と貧困との対立を絶対的に消滅させることへと導けるはずだという空想的直観を企てなければならぬ場合にだけ見過ごされることがあり、あるいは逆に、我々がここで人間の側からなすべき手立てが何もなく、人間的状況の対立が不変の神の思召しによってすえられ、このことで貧困が静寂主義的に、人間の運命に慣習的に内在するという空想的直観を企てなければならぬとして、そうした事態が甚だしければ甚だしいほど見過ごされることがある。それは、人間と人間の状況にかんする神の思召しは無制限ではなく、むしろ、人間的自由によって制限されているということである。摂理と自由とを一度に主張するキリスト的世界観あるいは人生観<sup>(七)</sup>は、たんに、世界を再創造するという人間的自由の力についての空想的で傲岸な直観と闘うだけでなく、人間的な生の条件の普遍性と陶冶形成の不可能性という運命主義的、静寂主義的理解や、これをもって世界観と人生観とがたんに(インドのカースト制度のように)自然に規定されたものになってしまうような理解にたいしてもまた闘うのである。

### [ギリシア・ローマと奴隷制]

ところで、[古代ギリシアにおけるような]異教世界に立ち入ることで、キリスト教は社会が富める者と貧しき者に分かれていただけでなく、自由人と奴隷に分かれていたことを発見する。この自由人と奴隷との関係に、我々は特別に注意を払わねばならない。それはたんに、労働者階級の大部分を含む我々の時代のプロレタリアートと古代の奴隷状態とのあいだに内的親和性があるからだけではない。むしろ、国民的福祉の主要源泉である労働がギリシアやローマの異教世界でどう理解されていたかが

示されること、とくにこの理由からである。すべての過酷な肉体労働によって感覚的欠乏が満足させられるのであるが、この労働はもっぱら奴隷が担うものとされた。というのも、そうした労働は自由人である市民には無価値なものと思なされたのであり、市民は麗しい人間性を表現するため、国家の関心事や自分自身の精神的発展のために生きているだけだったからである。そのために、市民は多くの自由時間、閑暇 (otium) があることを望んだのである。文化的に高踏になればなるほど、肉体労働にたいする嫌悪がいつそう甚だしいものになった。肉体労働を通じてさえ、つまり比較的低次の諸欲求を満たすための労働を通じてさえ、人倫的、宗教的人格発達が成し遂げられうるし、成し遂げられるべきだということ、このことは、当時の最高度に深遠な思想家たちにとってさえ、プラトンやアリストテレスにとってさえ到達のできない観念であった。人間には二つの階級があったにすぎない。その一方はすなわち少数派であり、自由人や富者であって、彼らは人間たるに価する生活を営んでいた。他方で、別の人々は大多数派であって、性格が下劣と思なされ、労働はするが、享受を欠くように運命づけられたにすぎない。たんに、かの「王の魂<sup>(A)</sup>」をもつ少数派が、理性にしたがって美しく価値のある生活を送れるようにし、そのために閑暇、つまり自由時間をもてるようにするために、[大多数派が]諸々の基礎や条件を生産するように運命づけられたにすぎない。[こうして]奴隷である大多数派に属する人々それぞれもまた、不死の魂をもち、永遠の生に定められているということはまったく度外視され、想定外とされていた。奴隷はたんに、魂を吹き込まれた道具と思なされ、同時にその道具は魂のない奴隷と思なされたのである。

[ちなみに]奴隷の魂には徳へのまったくの未成熟が、つまり何がしかの高貴さや卓越性への未成熟が前提される。奴隷の魂は貧しいものなので、つねに継続的に訓練・陶冶のもとに置かれねばならないから、そのことが計画される。プラトンでさえ、[自由人は]自分の奴隷を熱心に訓練・陶冶すべきだとアドヴァイスを行っている。奴隷はほとんど家禽類と変わらないし、家禽類は人間たちに便宜を図るために生まれたにすぎないというのだ。たしかに奴隷は理性の声を聞くことができる。その声が外から、彼の主人の声として聞こえる場合には、理性の声を聞くことができる。しかし奴隷は自ら理性をもつことがなく、何がしかの理性的な生の課題を担うことができないし、そのための諸手段を見つけ出すこともない。これらの奴隷の個々の者にはよりよい条件を保持し、理性を表現するだけでなく、天才を発揮する者たちがいて、[彼らは]市民的諸芸術のために登用されていた。だがしかし多数派の奴隷は悲惨な生活を送っており、その生活のなかで彼らはしだいに倫理を失っていく、ある部分は彼らの主人の悪しき事例を見習うことで倫理を失っていく。[古代の]自由な人間性、政治的生活、詩情や芸術、しばしば演劇をともなう美しい文化にたいして賛辞が繰り返えし贈られるのを聞くが、人々が視界を向けねばならないのは、むしろこうした暗澹たる影の部分である。[たしかに]そうした麗しい文化がギリシアやローマにはあった。そうだ人々が、キリスト教よりもはるかに人間的だったとするギリシア・ローマの宗教にたいする賛辞を耳にす

るさいのギリシアやローマにはあった。だが先のおぞましい影の部分に眼を遣るなら、その部分はシラーがギリシアに心酔し、神々とその幸福な状態への賛美を詠うさい、容赦のない皮肉に聞こえるのである<sup>(九)</sup>。

君たちが世界を統治していたとき  
歓喜という軽やかな天使の絆に  
はるかに幸福な人間の時代が導かれていた  
麗しき実在が寓話の国から立ち現れたのだ

というのも、これらの麗しき実在たちは、人間の悲惨さや困窮にたいしてまったく無関心で感じるどころがなかった。ギリシア人の宗教もローマ人の宗教も集団的なものを含んでいない。文化の堆肥であることに定められた運命にある人間たちを解放すること、このように見なされた無数の人間たちの人間らしい性格を毀損するこの奴隷状態から、価値剥奪という誤った取り扱いから解放すること、[ギリシアの宗教もローマの宗教も]この解放のための集団的可能性を毛筋ほども含んでいない。哲学もまた奴隷と自由人との関係の成立を不変の自然法則に基づくものと見なしている。アリストテレスは奴隷を自然の秩序にあるものと見ている。なぜなら、より低いものがより高いものに奉仕しなければならないことは自然法則だと考えるからである<sup>(十)</sup>。

国民の福祉の発展にとって、ここに語られる関係は必然的に[発展を]制限し、抑止する仕方働いたはずである。自由人は労働しようと思わず、奴隷だけが彼の労働をやむを得ざるものとし、ただ鞭打ちを避けるという必要のかぎり働いたにすぎない。そうした場での物的財の生産は、より良い関係のもとで可能になる豊かさと同様の豊かさを示すことができないだろう。トクヴィルもまた近年のアメリカの状態について同様の注記を行っている<sup>(十一)</sup>。すなわち、労働が奴隷によって行われる諸々の地方では、奴隷制が廃止され、労働が自由な人々によって行われる諸々の地方に比べて生産の面での停滞や実りのなさが示されていると注記した。後者の[奴隷制が廃止された]地方では、農耕や商業、工業が花開くように進んでいるというのだ。トクヴィルは、奴隷制度の廃止が黒人と同様に白人にも多大な利益をもたらすと考えているのである。

### [キリスト教による世俗的解放]

かの[奴隷の]不幸で没価値の状況、そのさい何百万という人々が人間の諸権利を奪われていたのだが、そうした状況からの解放と救済をもたらすのがキリスト教である。キリスト教は真の自由と平等を宣言することによって、そのことを遂行する。キリスト教は万人が、神像として創造されていることにより平等であると主張する。万人が罪人であり、掟と審判のもとに繋がれていることから平等だと主張する。万人がキリストにおいて神の子の自由へと召されていることから平等だと主張する。キリスト教は社会において必要な相違を取り除こうとするのではなく、それらの相違を愛の一体性のなかで調

和させようとする。キリスト教は弱き者や抑圧された者、女、奴隷、貧しき者、こうした者たちをこの世界で軽蔑すべきものとは見なさない。キリスト教はとくに貧しき者たちのなかに第一の告知[の対象]者を見出す。彼らが生活のための財に事欠いている事態が、彼らをしてこの世俗世界によらない国からの福音を受け入れる者とする。富める者たちにたいしては、その富の誘惑と危険にたいして強いことばで警告を与える。そのことは直観的な仕方富める人間とラザロ[病気で苦しむ人々]についての福音のなかに表現されている。富は、人間たちがそれに仕えても、その奉仕が主への奉仕とは相いれない偶像、マモン<sup>(十二)</sup>と呼ばれる。富める者たちが未知の国に彼らの希望を向けず、生ける財に[だけ]希望を向けることにたいして忠告を与えるのである。

ところで、キリスト教が人間的社会を、清貧のなかに生きる禁欲主義者の社会にするだろうというのは明白な誤解である。だが、富める者たちが、財を信頼できる仕方管理し司る執事と見なされるなら、[本物の]豊かさだけが、人倫的、宗教的精神による奉仕としてのキリスト教にふさわしい。というも、その財の利用や応用にさいして彼らは神の法廷を計算に入れるはずだからである。富が財の信頼性と見なされるところでその管理が考慮されれば、富は貧しきものや希望のない者の困窮を救うために用いられるであろう。我々はそのことを多くの病院や穏やかな諸施設のなかに見るだろう。それらの事態は、まさにキリスト教がローマ帝国に普及した後には、異教にとっては新たなもの、未知なものとして突然に出現するであろう。というも、どんな豊かな異教徒にあっても、どんなに賢明な異教徒であっても、苦難にあえぐ彼らの兄弟たちを援助するのに、そのような[困窮者の救済]は思いもよらず、ただこれらの人々をその運命に任せにすぎないからである。

しかしながら、富はまた、キリスト教が昔日のことばを無視しなかったことで、社会全体の利益として、包括的な文化目標のために用いられるだろう。すなわち、「諸君の行いで富が手段であるように大地を用いたまえ。諸君の行いで、貧しき者たちが働くようにしたまえ。だが、異教の奴隷としてではなく、自由人として働くようにしたまえ。労働のために支払いを受けるだけでなく、労働において注意を引き、尊敬されもする自由人として働くようにしたまえ。」

まさに、肉体労働の評価において、いたるところで肉体性に敬意を払うキリスト教が新たなものを社会関係のうちに導入した。農耕はギリシア人においてもローマ人においても尊重されており、キンキンナトス<sup>(十三)</sup>は犁の後について歩くことを恥とはしなかったが、手仕事は、まったく軽蔑の対象であった。キケロ<sup>(十四)</sup>によれば、手仕事という生業は汚い労働である。高貴な者はその仕事場にふさわしくない。それゆえ、仕事場は奴隷たちあるいは半自由人たちに委ねられる。これにたいして、キリスト教は手仕事を高貴なものにし、イスラエル民属のもとで見出された見方、つまり手仕事を尊重し、律法学者であってさえ手仕事を学ぶべしと主張する見方を承認した。イエスの養父であるヨゼフは大工であったし、その伝統にしたがって救世主は養父の手仕事を習ったのである。使徒パウロ<sup>(十五)</sup>は、彼の偉大な精神的活動と並んで、天幕づくりの仕事を営

んでいた。パウロはテサロニケ教団<sup>(+六)</sup>に手紙を送った。その会員の多数派は職人であったと思われるが、その手紙のなかで、彼は手を使って働くよう警告し、働こうとしない者は食べるべきではない、という重要なことばを語った(「テサロニケ人への第二の手紙」第三章)。彼は働くことの動機として、人は乏しき人々に何がしかを与えることができるということ、このことを語っている(「エペソ人への手紙」第四章)。

[ところで、]キリスト教の世界において手仕事のもつ意味がどのようなものであるのか、中世の職人同業者組合ギルド<sup>(+七)</sup>のなかに大いなる一例を見ることができる。同業者組合はたんに協力して仕事をする団体であるだけでなく、すべての生活関心を共にする団体でもあった。職人と徒弟が親方と同じ屋根の下に暮らし、彼らは親方の父親的な監督と彼の奥方の母親的な監督のもとで、その家の子どものように過ごした。同じキリスト教の信仰に統一されることで、同業者組合そのものは、そこに暮らす貧しい者に配慮し、人倫的見地から個人は全体の制御のもとに服したのである。彼らはその活動のなかで大いなる有能さを発揮し、ケルンの大聖堂やストラズブールの聖堂<sup>(+八)</sup>を建設したような偉大な芸術家たちを彼らのなかから輩出した。ここには古代世界の蔑まれた奴隷状態とはまったく対立する事態が示されるのである。

福音主義的な自由の原理や平等の原理の考察、貧困や富の考察において、肉体労働の高貴化において、キリスト教は第一義的には天国における市民権を人間たちに獲得させようとするものではあるが、生活にかかわる諸財の分配と諸国民の福祉の問題にたいする視点においても社会形成的である。キリスト教原理を諸国民に浸透させるという同一の目標、したがって物的生活関心が精神的目標によって、すなわち人間性の目標と神の国の目標とによって制御され、規範化されるという同一の目標、その目標において、社会にあってもまた生活諸財の釣り合いの取れた分配、富と貧困の両極端、過剰と欠乏の両極端が均等になるのであろう。これらの両極端が顕示される場合は、キリスト教の諸原理が浸透していない印であり、キリスト教からの離反が生じている印であり、異教的原理が影響力を行使するようになったことの印である。キリスト教が諸国民の福祉と国民経済にかかわりがない状態、それはいわば、労働と賃金が物的意味をもつだけで倫理的意味をもたない状態、諸国民の福祉のための諸手段を認識するために社会の自然法則(生産、生産と消費、価値および価格の上昇や下落、人口の状態などなど)だけを研究すべきだとし、自然諸法則を人倫的諸法則<sup>(+九)</sup>との関係にすえない状態である。

これにたいして、自然諸法則を倫理諸法則に従属させて実用化することがまさしく課題であって、そこにまた、敬虔が未来の生活だけでなく、現在の生活をも約束すること(「テモテへの手紙」第四章)が示されるだろうし、国民経済における一面的個人主義と一面的社会主義との両方が、キリスト教の倫理的社会主義のなかに中和剤であるもの、より高い真理であるものを見出すであろう。

## 第二章 国民経済学的個人主義:労働者問題

### [スミスと分業の論理]

国民経済学における一面的個人主義は、一七七六年に出版されたアダム・スミスの諸国民の福祉、その本性と起源にかんする有名な著作『諸国民の富』に表現されている<sup>(一)</sup>。彼は、国民経済学をひとつの学問に高め、社会の自然諸法則にかかわって新たな認識の豊かさを獲得したのであり、そのことで[彼の名は]世界的に有名である。しかし、彼の才能と長所がどんなに偉大であるかと思ってみても、その体系そのものは純粋に自然主義的であり、倫理的なものに無関心である。スミスの理念はフランスの百科全書派のエルヴェシウスやダランベール、経済学者のチュルゴーやケネーの影響のもとに展開されている<sup>(二)</sup>。この圏域の人々を支配する思考様式は基本的に自然主義的で、もっぱら大地の恩恵に向けられている。つまり、人間の超地上的使命にかかわる観念、天とキリスト教の観念は彼らにとってははしだいに消失してぼやけたイメージに変わっているのだから、彼らの道徳においては利己心が支配的原理である。彼らは、自己の利害関心もまた諸国民の利害関心において原理であるべきだとしたのである。

倫理的なものがアダム・スミスの観点からは離脱している。それはすでに、彼が物的、経済的諸財の最大限に可能な量[の生産]を目的にしているだけで、これら諸財の均衡のとれた分配の視点は取り入れられておらず、諸財が人間的な生活というより高い目標との関係で位置づけられていないことに見られる。その目標達成のための諸手段は、労働の分割すなわち分業であり、自由競争である。ここで労働によって理解されるのは、スミスにとって唯一生産的である物的労働にすぎない。芸術家や学者、医師、聖職者、政治家、官吏などの人たちは不生産的で不毛な人々である。なぜなら、それらの人々は他の人々の労働によって養われているだけからである。後者の人々において、身体的滋養と感覚の楽しみが当の国民にとって最も重要で至高のものであるという思想が基本なのである。このように労働そのものは富を獲得し享受するための自然必然的な手段と解されるにすぎず、人間の使命から遂行され、人間が喜びと満足とを見出すはずの義務と解されることもないのである。

しかしその場合、労働は尊厳を喪失している。労働者は人間と見なされず、たんに非人格的な労働力とだけ見られ、利用され使い尽くされると新しいものに取り替えられねばならない道具と見られるだけである。それゆえ、日雇やあらゆる種類のサービス従業者に支払われる賃金は、それらの人々すべてを再生産できる質のものでなければならず、日雇い系や労働者系の人々を生み殖やせるように再生産できる、そうした質のものでなければならぬと、この国民経済学も主張する。その社会はつねに、新しい道具を必要とするからなのである。

この国民経済学の目標は生産をいっそう拡大できる分業によって促進される。

個々の労働者の妙技は、彼がもっぱらひとつの対象に没頭するときにいっそう大きなものとなることができる。ある種類の労働作業から他の種類の作業への異動を意識的になくすことで時間を省くことができる。この労働分割、分業はとくに機械によって発展する。このことは、アダム・スミス自身が例示するピン製造の手工業の事例で考えられる。分業は機械によってセットされるのだ。ある者は針金を引き伸ばし、第二の者がそれをまっすぐにし、第三の者が切断し、第四の者がそれを尖らせ、第五の者が頭部をつけるために先端を加工する。ピンの頭部を仕上げるには一組の特殊な作業が必要である。それを固定することは特殊な仕事であり、ピンを白くすることは別の仕事である。さらに、ピンを紙の上にすえつけるのがそれ自体独自の作業であって、このような仕方では、他の場合には一つの工程がしばしば二つか三つの作業によってなされることもあるが、重要なピンの製造工業はおよそ一八の特殊な作業に分けられるのであり、それが何がしかの製造工場の特殊な作業によってなされるのである。アダム・スミスは、工場で十人が作業に従事していて、それゆえに一人で二つか三つの特殊な作業を行っていて、一日に重さにして一二ポンドの留めピンを作っているのを見たことがあると語っている。一ポンドで中ぐらいの大きさの留めピンが四千本である。十人だから一日に全部で四万八千本を製造することができるだろう。しかし、それら全員がそれぞれで特別な作業を行い、それらの何人かがこの特別な手作業の訓練を受けなかったとするなら、各々がきつと一日に二〇本のピンも製作することができなかつた、おそらくは一本もつくることができなかつたであろう<sup>①</sup>。

### [自由放任の陥穽]

しかしながら、こうした主張がどれほど卓抜であっても、留めピンの頭をつける作業に時間を費やすことが、いや生活の大部分を費やすことが人間にふさわしいことかという道徳的問題がここには生じる。あまりに発達しすぎた分業における事物の大量生産が人間の犠牲によって行われることは倫理的には欺瞞である。というのも、こうしたことは人間の魂にはいかなものだろうか、という問題が生じるからである。人間の魂は、一連の長い年月によって絶対的に精神を欠いた作業を行うことで日々多くの時間を費やす、おそらくは自然の時間を大量に費やす。そこで人間の本質実在の精神的部分はまったく無為になっており、人間自身が機械の一部になっているだけである。こうしたことはいかなものだろうか。大工業の展示品を飾ることのできる物的財の最大可能な総量を達成するために行われる、こうした無際限の分業の拡大を考察するならば、[我々は]救世主イエスのことばを思い起こすことができる。すなわち、人間の役に立つよう贈られたものが何であれ、人間が全世界を獲得したそのときに、人間の魂に害を及ぼさなかつたものがあるだろうかということ。

国家がまったく大きな擁護者と考えられており、同業組合と職業団体の制度が支配し、抑圧的で、自由な発展を妨げる諸々の特権や独占をともなっていた彼の時代の構成組織にたいして、アダム・スミスは全領域での自由競争を主張した。国家はそ

の外部に置かれるべきであり、介入すべきではなく、自由放任 (*laissez faire, laissez aller*) の基本命題に従うべきだとされた。私的諸個人に、彼らがどう彼らの諸資本を構築するか、指揮するよう試みるであろう国家は無用の長物であるだけでなく、何がしかの個人に認められるべきではないだけでなく、何がしかの議会あるいは参事会にも認められない権威と見なされるだろう。国家はたんに、個人的自由を抑圧してきた古い紐帯、生活とそのダイナミズムを阻害してきた古い紐帯を解体すべきである。アダム・スミスは、各個人が自分自身の関心に配慮することをたいへんよく知っている。個人の経済活動が自分の利益に眼差しを向けること、それだけに、公共の福祉に最良に奉仕することがらはわずかしか遂行されないはずなのだが、そうした利己心に発するものとして自分の利益に眼差しを向けることをスミスは自然法則と見なしていた。というのも、各人は自分自身のために働くことによって全体のために働くからである<sup>12)</sup>。したがって公共の福祉は万人のエゴイズムの結果として現れるのである。

しかし、まさにここに、このシステムにおける倫理的欺瞞もまた明白になる。すなわち、その自由競争はより高い観点によって制限されていない場合には自然主義的原理、物理的原理にすぎない。というのも、ここに導入されるのは強者の権利、げんこつの権利であり、万人の万人にたいする闘いだからである。このことを我々は動物界に見るのだが、そこでは、生活財の獲得をめざす自由競争が最広義目的のなかにあり、弱い者の運命は強者によって圧迫される。自由競争が原因で生じる倫理的契機は個人的、人格的道德力の覚醒と強化である。これらの諸条件に自由競争はその場合制約されねばならない。たとえば、自由競争が生じるべきであるのは、平等な立場にある者のあいだにすぎない。羊のようにおとなしい人を、先を急いで走る人と競わせ、貧しい小商人を大資本家と競わせ、わずかな土地の所有者を大土地所有者と競わせるのは道德力の強化には役立たず、自由の名のもとに物理的なものを君臨させ勝利させることに役立つだけである。自由放任の原則にしたがって最良の仕方では社会の福祉を促進し、各人が自分自身の利益を追求することで全体利益の追求を促進し、公共の福祉が万人のエゴイズムの結果として現れるとするアダム・スミスの主張は、まったく不確かである。たんなる自然衝動にしたがうことで、正義にかなった状態をつくり出すことができるというのは、それ自体ではイメージとして保持できない。なぜなら正義にかなったこととは、自然の世界や、たんに自然的な人間の世界とはまったく別世界に属し、まったく別の側面に由来するにちがいないからである。

これにたいして、自然が倫理的状況において支配することが、たんに社会的混乱を引き起こしうるにすぎないことは、あらかじめそのことの経験に先立って知ることができる。自然支配の経験が明らかにしたことは、自由競争がたしかにすべての独占と、それに結びついた不利益を廃絶したということである。だが、自由競争が新たな独占、資本による独占、その圧迫のもとで無数の人々が古代世界の奴隷たちに比しても基本的にましとはいえない状態に置かれる、そのような独占を創出したということでもある。

資本とは、ある場合には必要な支出を否定するために用いられ、ある場合には諸々の享受の獲得に用いられ、ある場合にはストックとして保存されるにすぎない資産ないし富と同一の[受動的な]ものではない。資本は生産的資産であり、進歩し成長するなかで新しい資産を生み出すものであり、[それゆえに]資本は投機と異ならない。古代の異教世界や中世において、そうした資本はわずかに発達していたにすぎない。古代世界には、途方もなく大規模な諸々の富が築かれていたが、しかし、それらの富は主として土地所有と奴隷たちから構成されており、投機資本や地代資本から構成されるものではなかった。投機資本や地代資本が古代世界に最初の一步を記していたとしても、[富とは]そうしたものではなかった。

中世においても同様に、諸々の大規模な富が築かれている。だがしかし、それらは主に諸々の自然の利用や、主人に依存した人々が主人のために行う諸々の夫役によるものだった。かの[投機的]資本は発達することができない。というのも、資本の発達には大量の諸規制や諸制限、特殊な法的諸規則によって阻害されたからである。それらの諸規制は中世の世襲制度や同業組合、職業諸団体、その特権や独占と密接に結びついていたのである。

[そこにあって]かの資本がはじめて大規模な体裁で登場するのは、一五世紀にヴェネチアを経由してオリエントとのあいだで営まれた世界貿易においてである。すなわち、そのさいには先にふれた諸規制が撤廃された。ポルトガル人たちが東インドへの海路を発見していたので、アウグスブルグのフッガー家<sup>(三)</sup>の兄弟たちは探検隊をそこに送り込み、予め支出した一千ダカットを取り戻し、さらに一七万五千ダカットの純利益をえたのである(ラッサール)<sup>(四)</sup>。

これが資本であり投機である。ルターはフッガー家の巨万の富についてふれ、彼らが神聖ローマ皇帝の戦争準備のために一二トンの金塊を貸付けたと陳述し、[さらに]かつてあるフッガー家の一員が税金を払う段になったのだが、彼にどれだけの財があり、あるいはどれだけ金持ちなのかわからないから、税の額を判断できないと答えた、と語っている。というのも、そのフッガー家の一員は全世界に、つまりトルコやギリシア、アレクサンドリア、フランス、ポルトガル、イギリス、ポーランドに金の蓄えがあったからである。だが、そのフッガー家の一員は、アウグスブルグで所有していた分から税を支払うだろうというのである<sup>③</sup>。

### [ルターと資本主義]

こうした新たな現象にたいしてルターがどのようなスタンスをとったのかをここで思い起こすことに無関心ではいられない。そこでルターは逡巡を重ねた末、[その現象を許容しては]神の掟にしたがって正しく歩むことができないことを悟った。彼はきわめて多くの人々を悲惨のどん底に突き落とした高利貸や利殖ビジネスをこの上なく辛辣に語り、同様の仕方で、まさに独占に他ならない諸々の会社、そうしたビジネスに没頭する会社を非難している。なぜなら、これらの会社はあらゆる商品を手中に納め、そのこと

で都合に応じて価格を吊り上げたり吊り下げたり、小商人層全体を圧迫したり廃業に追い込んだりの好き放題をしているからである。それはちょうどカワマスが水中の小魚を根絶やしにしてしまうこと、カワマスがまさしく神の被造物の主で、信仰と愛の法則から自由であるかのように、水中の小魚を根絶やしにしてしまうことと同様である<sup>④</sup>。

こうしたことから、人々は香辛料をかなり高額で買わねばならないとルターはいう。今年、それらの会社は生姜の値段を吊り上げ、来年にはサフラン等々をそうすることで、欠損あるいは損益を被ることなくうまく管理するだろう。というのも、彼らの会社が生姜でしくじれば、サフランで赤字を取り返せること、そういう仕方をつねに自分たちの利益を確保することを知っているからである。このことは、時間的、刹那的な諸財の本性に対立する。神はそれら諸財を諸々の危険や不確実さのなかに含み入れたのである。しかし、それらの会社は不確実で刹那的な諸商品が確実で、ある種の利得、永続的な利得を生むことを発見したという。世界全体はそれらの会社によって使い果たされ、あらゆる貨幣がその[会社の]財布のなかに仕舞い込まれ、またそのなかで泳がなければならない。王や諸侯にはこうしたことを監督する者がいなければならないし、彼らはそうした所作を禁じるべきだったのである。しかし、私は王や諸侯が[そうした会社の]財布のなかの一部を保有しさえすると聞いており、[新約聖書の]「エペソ人への手紙」第一章にしたがっていえば、「あなたの諸侯は泥棒仲間になっていた」のである。王や諸侯は一グルデン金貨や半グルデン金貨<sup>(五)</sup>を盗んだ泥棒たちを絞死刑にしていたが、「大泥棒が小泥棒を吊るす」という諺によって、世界全体を奪い取り、盗み取る輩の一味であった。これらの会社が生き残るとすれば、正義と誠実とは滅びるにちがいない。フッガー家やそれに類する会社は、[馬のように]口が手綱に結ばれ、制御されてしかるべきだというのである。

同様にして、ルターは先に述べた、インドやカルカッタから輸入された香辛料や金品、絹の衣装とともに輸入された奢侈品にたいして、利用するためではなくたんに装飾用の奢侈品にたいして不満を述べ、胡椒や生姜、サフランを湿気の多い地下室に保管して[湿気を含ませて] それらの重さを吊り上げ、色を上塗りして商品を偽装する等々を行う商人たちの詐欺行為を非難した。総じてルターは農耕を奨励して広げ、商業を制限する方がはるかによいだろうと考えており、未開拓で残された土地がまだたくさんあることに[衆人の]眼を向けさせたのである<sup>⑤</sup>。

### [労働者問題]

ちなみに宗教改革そのものは、それが中世的束縛からの解放を進めたかぎりでは、資本の更なる発達を後押しした。しかし、フランス革命の遂行とともに、あらゆる法的制限からの完全な解放が進められた。アダム・スミスが主張したような自由競争が十全な仕方で開始され、資本は十全な発達へと歩みを進めた。生と躍動に沸き、諸力の競合に沸く自由主義国家はおそらく、アダム・スミスの助言にしたがって諸問題に介入し

たわけではなかったが、しかし、私有財産法と個人・人格の安全が攻撃されたり、制約されたりしないことを重要視した。ちなみに、そのことをラッサールは「夜警奉仕」を行い、自由放任(laissez faire, laissez aller)の原則にしたがうためのものと表現した。「今や誰もが自由に億万長者になれるのだ。」そして今、新たな社会階級、すなわち億万長者の階級、あるいは金持貴族の階級が登場した。その階級には現代的ユダヤ人気質が高い地位を占め、ミズガルズの大蛇<sup>(六)</sup>と同じように、諸国の民衆にたいしても、諸侯にたいしても酷い圧迫を加えるのである。

自由競争が多くの諸力を発達させることに貢献し、多くの人間たちに福利をもたらしたことは否定できない。資本が社会にとっても企業全般にとって大きな意義をもち、普遍的な経済交流を保持して、たんなる国民経済と対立する世界経済を維持することも否定できない。しかし、その自由競争がはるかに多くの不幸な出来事や悲惨な事態をもたらしたと、途方もなく多くの人々が、日々のパンをえるために絶望的な仕方でも闘わねばならないこと、そのなかで彼らは最終的にはより強い者たちに完全に屈服することもまた否定できない。このことが、いわゆる労働者問題を、世界を揺り動かしており、将来社会の運命にのしかかっている労働者問題を引き起こした原因なのである。

まず我々はここで、諸々の大工業国の工場労働者の状態を考えてみよう。そうした国々では何千何万の貧しい労働者が富裕な工場主とかかわりながら暮らしている。工場主たちは相互に競争しあっている。そして貧しい労働者たちもまた同様に、生活の糧[を得る手段]として仕事を見つけようと互いに競いあっている。雇用者と労働者の関係は人格的ではなく非人格的で、「労働と資本、この非人格的な対立」という言い回しのなかにも表現されるものである。[この関係にあつては]労働者はたんに労働力としてだけ通じるにすぎない。彼がある期間、雇用者にしたがうのは労働力としてである。雇用者は労働力をもうひとつの商品とみなす。古代の奴隷制との違いは、奴隷が個々の主人と結びついていたのにたいして、労働者は雇用者階級の全体と結びついていることである。雇用者が労働者に解雇あるいは工場閉鎖を通告するとき、労働者には空気を読んで生きろ、そのために、どこでも、どんな条件でも仕事が見つけられるなら、仕事を探して就く必要があるという示唆が与えられている。労働者の現実存在はまったくの無保障状態に委ねられている。彼はその日暮しで、将来に安心するところがないのである。

諸々の工場で営まれ、しばしば記述されている生活、この生活に我々が目を遣るなら、労働者は機械化の進んだ部門で働くがゆえに、その魂は精神を喪失して喜びもなく、[労働が]いやというほど単調であることを知っているであろう。というのも、労働者は肉と血をもつ機械の一部であるにすぎず、これと連動する鉄と鋼でできた他の諸部分に挟み込まれたものにすぎないからである。人倫的観点から見て人間生活の基礎となる現実の家族は、そうした労働者にとっては不可能である。通常、彼は結婚したくさんの子どもを儲ける。というのも、プロレタリアートには逞しい増殖力があり、(すでに

[聖書で]、エジプトにおけるイスラエルの子どもたちについていわれているように、エジプト人たちが彼らを苦しめれば苦しめるほど、彼らはその数を増したのである)。しかし、労働者は家の暖炉の傍らで営まれる快適な生活を知らない。彼自身だけでなく、彼の妻や子どもも朝から晩まで機械を相手に働かねばならない。機械を相手に、彼らはお互いに違った仕方で働かなければならない。まさしく、機械を用いれば筋力は要らないのだから、女や子どもでさえもこき使うことができよう。

たとえば刺繍工場では、子どもたちの小さな指の方がおとなたちの指よりも、繊維を繋ぐのに適している。主婦も一日中工場で働かなければならないから、彼女は主婦や母の仕事に没頭しにくくなり、家事にかかわることをすべて無視するようになる。彼女は工場で働いていない子どもたちを他の人々の劣悪なケアに委ねねばならないか、アヘンによって眠った状態にしておかなければならない<sup>(七)</sup>。この工場の生活は魂にとって破壊的であると同時に、身体にとっても破壊的である。子どももおとなも死亡事例が多い。大勢の子どもがモロック<sup>(八)</sup>のような蒸気機関の犠牲になっている。そうした[非道]の端緒は、イギリスの工場主たちが既存の商業上の関係では外国との競争に耐えられないだろうと政府に申し立てた一八世紀末のことで、その時に、たいへん尊敬を集めていた偉大なウィリアム・ピット<sup>(九)</sup>のような人物が、「諸君は子どもたちを使いなさい」という恐ろしい発言を行ったのである。だが彼は、その諸帰結を見通してはいなかった。工場主たちは子どもたちを受け入れ、早すぎる死の犠牲に供した。なるほど工場制度は再び繁栄し、自由競争に耐えることができたであろうけれども……。

このようなことが、酷い性質の異教であることを証明する必要はほとんどない<sup>[六]</sup>。おとなたちは人生の途上で死んでいく。彼らはたんに惨めで片や不健康な食生活を維持しなければならないだけではない。不衛生で高温多湿の環境のもとでの機械労働自体もまた、多くの観点からして健康にとって有害である。身体に不自然な姿勢を強いられた結果としての四肢の奇形や[病気にかかりやすい]腺病質の病、胸の病はこの労働の一般的帰結である。たとえば、綿や麻の紡績では大量の埃が周囲に舞っており、それを労働者が吸い込むことで胸を冒され喀血をとまなうことになる。労働者はそうした埃にあたるものを鋼ないし金の研磨のさいにも吸い込むのである。

しかしながら、本来の工場労働者以外でもまた同様の現象が生じている。我々はこので流行の服飾を扱うブティック、装飾が富裕な婦人層向けに施されているブティックで働く若い女の子たちを思い起こすだけでよい。同様にして、しばしば語られるロンドンの縫い子たちを思い起こすだけでよい。(エンゲルスの記述によれば<sup>⑦</sup>)彼女らは通常は、わずかな居場所だけが許されていて、冬にはそこにいる女の子たちの動物的体温だけが暖を取る唯一の手段というような小さな屋根裏部屋に詰め込まれて、きわめて悲惨な生活をしている。彼女らは働くために身をかがめながら、早朝の四時、五時から座って

縫い物をしていて、数年たつと健康を害したり目を悪くしたりし、[現世の]時間の墓場に召されても、最も差し迫った生活のために必要なものを手に入れることができない。

イギリス国内でも国外でも、貧しい縫い子たちの状況はミシンの発明によっていっそう厳しくなっている。最も性能の悪いミシンを使っても、五、六人の縫い子がこなすくらいの作業量を[一人で]することができ、そのことは、機械の発明がどんなに素晴らしいものであっても、労働の機会減らし、労賃を下げることに貢献できるだけなのである。

自由主義と資本主義の側から語られるのは、これらの社会主義的諸著作でさらに読むことのできる記述(たとえば、一八四八年刊と、たしかに今ではかなり古いとしても時代遅れではないエンゲルスの著作や、一八七二年にK・マルクスの『資本論』によって確認され、継承された著作の記述)が一面的で、過剰反応だというものである。だが、これらの作家によって言及された諸事実の記述が力を失っているわけではない。穏健さや不偏不党性を否定できない人々は、個々には労働者の状態の改善のためにどんなに多くのことが行なわれていても、そのさい高貴で人間性に与しようと感じる雇用者がどれほど多くの努力を払ってしようとも、全体としては大きな弊害があり、人間性の名において状態の改善が求められる<sup>⑧</sup>、と説明するだろう。きわめて顕著に不満が表面化しているイギリスにおいて、雇用者の恣意から労働者を守るために国家の側から多くの制限が定められている。たとえば衛生上の観点で、すなわち空気やその場の環境の観点で、国家の側からの監督、労働日の制限、児童や女性労働の利用の制限が定められている。しかし、これらの関係諸規制を参照することで、制度それ自体が批判され、国家は「自由放任」の原理にしたがうことに満足することはできな<sup>⑨</sup>。[むしろ]そうした自由の制限のために[国家が]介入しなければならないという判断が下される。したがって、国家は問題の外部にとどまるべしとするアダム・スミスの理論が維持できないという判断が下されるのである。しかしながら、これまでのように国家の側から行われたことはまだごくわずかであり、その意義はすぐ消えてしまうほどのものにすぎない。

労働者たちの状態は彼ら自身に責任があるのだ、なぜなら彼らは、賃金を稼いでいるときでも儉約して貯金せず、刹那的に生きているだけで、「短いが面白おかしい人生」という原則にしたがっているのだからだといわれる。彼らは、工場での男女の共同作業によって助長される性関係の放蕩と、アルコール中毒という二つの背徳に結びついている。賃金が支払われる土曜日の夕方はいつも、何千何万という労働者が決まったように酔っ払っている。とどのつまりが、彼らは非宗教的で、行けるときでも教会には行かず、唯物論的で無神論的な教説が身につけているともいわれる。こうしたことについては何の疑問の余地もない。しかし、それは驚くべきことなのだろうか。

こうして工場のなかで展開される罪深さの全体を恐怖しながら覗き込むところで支配的になる感情は、不快あるいは怒り、憐れみといったものではないだろうか。ここで我々の前に現れ出ているのは個人の罪という面が大きいのか、それとも社会の罪なのか。いったい、労働者たちが儉約しないのは、それほど理にかなわないことなのだろうか。彼らがそれほど儉約できないから、永続的な財産を保てないし、彼らの生存をも保障できないのであるが、数週間は彼らの生活の糧になれるだろうものを、彼らが数

日の享樂三昧に費やすことを好むとしても、それはそれほど理にかなわないことだろうか。高貴な性格の人々のする享樂が身近なものでないからといって、労働者たちが上記の背徳に結びついていることが驚くべきことなのだろうか。誰もが労働者たちの精神發達を問題として取り上げないのに、彼らが時代精神に基づいて無神論的、唯物論的教説に聞きしたがうのが驚くべきことなのだろうか。というのも、この[精神發達という]観点で諸々の学校で労働者向けに行われていることが効果的だとは誰も自覚していなかったからである<sup>(+)</sup>。彼らにキリスト教が欠落していたとしても、[それは]しばしばあることだが、彼らにはキリスト教を身に着けるための時間的余地がないからである。すなわち、イギリスで行われていることだが、労働者にたいしてキリスト教は干乾びた諸々のドグマの形式で提供されるのであり、それらの形式は告白的諸論争への道案内をするのであるが、もちろん労働者には関心の湧くものではない。労働者の身近なところに不信仰論や宗教否定論があるが、それはつねに人間の自然な心とつながっているので、その理論の妥当性は、労働者が生活の困窮のなかで味わった不幸な経験によって確証されているように思える。

ブルジョワジーおよび資本主義のオプティミズムの人間観にたいして、労働者にあってはペシミズムの人生観が形成されている。かつてカーライル<sup>(+1)</sup>がイギリスの綿工場の労働者について語ったことが多くの労働者にも当てはまる。すなわち、「この世は労働者にとって家庭的な家ではなく、野蛮で無益な艱難辛苦や憤激、怨念に溢れた悲惨の牢獄、自分自身とすべての人間たちにたいする怒りに火をつけた悲惨の牢獄である。それは緑なし花咲く世界、神によって創られて統治される世界なのか、それとも暗黒の焦熱地獄で、硫酸の煙や綿の埃、アル中不安、激怒と労働苦に満ちた死の谷、悪魔によって創られて統治される死の谷なのか。」社会関係にたいする辛辣な風刺でも知られるバイロン<sup>(+2)</sup>は、彼の時代に労働者向けに用意されていた諸々の講演や読書協会によって教養を得ることができたイギリスの労働者に背徳を見ることはなかった。シュトラウスやルナンによるイエスの生の紹介<sup>(+3)</sup>もまた、労働者階級のなかで多くの読者を得たのである。

### [マルサスに見る自由主義の陥穽]

ごくわずかな賃金でも働きたいが、しかし仕事を見つけることができない大量の人間たちに眼をやるさいさらに、社会問題の痛みは鋭利なものになる。ヨーロッパの諸々の大都市においては、朝起きてもその日の生活維持のための糧をどのように得たらよいかわからない何千何万の諸個人がいる、そうだ、しばしば彼らは、おそらく天空と向かい合って眠らねばならないのだから、次の夜にはどこで頭を休めたらいいかわからない、そうした何千何万の諸個人がいるのだ。これらの人々の多くはわずかな、偶然手にした賃仕事を得られないかぎり、物乞いや泥棒によってその日を過ごさねばならない。こうした大量の失業状態にある貧しい人々が我々を社会的困窮の新たな契機、すなわち過剰人口に導くのであり、そのことによって社会において過剰な人々の

階級、社会が使用もしない、居場所も与えない、そうした人々の階級が現れる。アダム・スミスの有名な弟子マルサス<sup>(+四)</sup>は、この世に生を受けたいかなる人間にも生存に必要な諸手段を所有する権利があるということを不条理だと説明している。自分と自分の身内を養うことのできない貧者は、生まれる前に社会に彼の誕生が望まれているかどうか問い合わせなかった。だから彼が自然の祝祭の食卓にやってきて彼のためのご馳走も、彼のための座席も見つけれないとすれば、このことで自然は彼に出て行けといているのだと。マルサスが考えているのは、生存手段と人口とのあいだにはつねに不均衡があること、だが自然そのものが疾病やペスト、戦争、餓死によって不均衡を緩和すること、過剰になった人口を貧者たちのための福利施設で維持するのは、貧者の再生産を促し、そうして過剰人口を増進させることなのだから不合理だということである。それゆえ、各人には自助が勧められ、自由競争の原理にしたがうことが勧告される。マルサスはプロレタリアートにたいして、餓死しないために世話が必要なたくさんの子どもの儲けないう論ずるのであり、マルサスの弟子たちも、小さいが過剰な子どもたちに石炭の蒸気で痛みのない死を迎えさせることを提案したそうである。

だがしかし、このように根本的に異教的で心を失った考察に満足できる者は誰もいないだろう。元聖職者であったマルサスが、こうした考察によってどのように貧者に福音を解くことができたのか、理解しかねるところである。我々は食料と人口、パンと口とのあいだのアンバランスにかかわるマルサスの見解が、悲しむべきことに経験的事態によって確証されていることを否定するものではない。しかし我々は、このアンバランスが自然の罪である以上に人間の罪であること、このアンバランスには倫理的手段を用いて闘いを挑んで克服すべきであり、たんに個人の労働であるだけではなく社会の活動によって、つまり社会のよりよい組織化、未開墾の大地のよりよい利用、蓄えられたもののよりよい分配によって克服すべきであること、こうしたことを受け入れざるをえない。

個人主義やアダム・スミスの国民経済学では明瞭に解けない大問題の解決は、もうひとつの別の道、すなわち社会主義の道を通じて試みられている。こうした社会主義の実験の多くを夢想や妄想と見なせるとしても、[しかしそれは]試みられているのだ。自然という大きな食卓では、いわゆる「過剰で排除される人々」は、実際には資格のある人々と見なされるだろうこと、資本家たちを過剰と見なすべきであること、あるいは「過剰な人々」が資本家に食卓での着席を認めるかぎり、彼らがまったく別の分配を要求すること、こうしたことは人間性という性質にしたがえば、不自然と見ることはできないのである。

### 第三章 ユートピア社会主義と革命的社會主義

#### [モアのユートピア]

一面的な個人主義あるいはリベラリズムはフランス革命の自由の理念に由来する、つまり、平等を消去して展開された自由の理念に由来するのだが、[他方で]一面的社会主義は[革命の]平等[理念から]、すなわち自由を消去して展開された平等から出発する。その平等は諸個人のあいだの不自然な相違を取り除き、社会と兄弟性とを主張し、万人に同一の権利と同一の財を要求する。ことここにいたるごく簡単な道が、私的所有と私的職業のすべてを廃棄すること、社会を大きな共通の家所帯に、個人ではなく社会が大所有者であり、大資本家であり、大雇用者で、それが労働と享受とを万人に平等に分配するのだが、社会をそうした家所帯に変えることであるように思える。

こうした思想は古いものであり、しばしば詩人によってすでに諸々の描写が与えられている。それらの描写が証言するのは、当の思想がこの地上の現実よりも空想世界にふさわしいものだということである。その思想はすでに、プラトンの『共和国<sup>(一)</sup>』のなかであり、それ以来しばしば、社会主義的、共産主義的諸理念を展開した多くの国家小説のなかで繰り返され、現実の不完全さや不正義の状態にたいする間接的な批判や風刺を含むものである。これらの国家小説のなかで有名な作品は、ヘンリー八世時代のイングランドの司政長官であったトマス・モア<sup>(二)</sup>による新島『ユートピア』(一五一六年)にかかわるもので、最も重要なものといってよい<sup>⑨</sup>。ユートピア(どこにもないところを意味する)は、周囲を岩礁に覆われた南海の孤島であり、そのことが誰であれユートピア人の水先案内を同伴しない人々には近寄れない理由である。ユートプスという男にちなんだ名をもつこの国には、一五〇万人の市民が住み、純粋な民主主義体制を採り、選挙による官吏と生涯その地位で働く国家元首とがいる。四〇人がひとつの社会集団をなし、共通のリーダーにしたがう。そのような三〇の集団にはひとりの責任者がおり、それらの責任者三〇〇人にひとりの監督責任者がおり、統治機構の頂点には長老がいて、長老は国家元首の大統領のもとに集合する。民主主義体制によって自由[の理念]に配慮がなされるが、万事を規定する最高の思想は平等である。

ユートピア島の一都市を取り上げて見れば、すべての都市を見たことになる。真っすぐに平行に走る通りのある五四の華麗な都市があり、すべてが同じ規模で、同じ計画によって建設されている。どの通りの家々もずっと連なっており、同質の素材からなり、住民が私有財産趣味を身につけないように、十年ごとに抽籤で配分されるのである。各家の裏側には住民たちが草木を植えたり耕したりするのを許された庭がある。それぞれの都市の周辺には住宅や作業家屋の建つ境界地があり、その土地の耕作に

は平均して四〇人が携わっているという。ユートピア人は都市と農村を交互に移住しながら暮らしている。というのも、彼らは男も女もすべて農耕に携わることを義務づけられており、それと同時にひとつの手工業にかかわっている。一日六時間の労働、つまり午前と午後各三時間の労働が義務づけられており、グループ責任者は労働時間に誰も怠けないように監督する。余暇の時間は、ある場合は芸術や学問のためであり、そのことに関係して男性向け女性向けの諸々の講義が開講されているが、ある場合にはリクリエーションのためのものである。旅行をしようとする者は、そのための許可をもらわねばならない。その人は自由にどこに行ってもよいのだが、どの都市でも、その人が習得した労働に参加することが義務づけられている。すべての労働者の暮らしは、自分たちの生産物を、都市の広場のまんなかにある商品市場にもって行き、そこから利用するものが彼らに手渡されるというふうである。政府は倉庫に集められた生産物の平等配分に心がけ、外国と交易を行って自国の所有する生産物を輸出して販売するのである。

こうしたユートピア人たちは、自然と理性によって定められている生活こそが幸福なのだとするので、[まさしく]幸福な生活を営んでいる。彼らは健康を楽しんでおり、彼らが病人になるのはまれである。だが、都市郊外に諸々の病院があり、そこで彼らは病人の手当てをする。ユートピア人たちは午後八時には床について八時間眠るから、毎朝四時には起きる。彼らの服装は質素で、趣味もよく簡便にできているが、流行の変化を追うものではなく、ユニフォームを、すなわち同性のすべての人々が同じ服装をしている。彼らの食事は女たちによって交代で用意され、それを彼らは大きな共同の食卓でとる。そうした食事の時間には書物の朗読が行われたり、音楽が奏でられたりするものである。

このユートピア人たちはたんに習俗に基づく人倫的生活を送るだけではなく、宗教的な生活をも営んでいる。彼らには素晴らしい寺院があるというし、たいへん高貴な聖職者身分の人々がいる。だが、この身分に属するのは少人数である。なぜなら、彼らはわずかな人々だけがこの高貴な職業に向いていると考えているからだという。彼らには宗教の自由があり、さまざまな宗教にたいして信仰告白がなされているが、人格神は否定される。[だが]死後の生を否定するユートピアの市民はありえないのである。

そして彼らは結婚の神聖さを厳格に守っており、離婚には最も厳しい罰が科せられる。彼らは早い時期に結婚するが、人口の過剰は植民によって制限される。立法は簡単で法的係争はまれで、大がかりな犯罪は例外的に起こるだけである。これらの犯罪にたいする通常の処罰は、犯人が奴隷にされ、黄金の鎖に繋がれることである。彼らは金品をおおいに軽蔑しているのだ。もっとも蔑視される容器、夜用の尿瓶やおまるなどは金や銀でできているが、高貴なことがらに利用される容器は粘土やガラスでできている。あえていえば、真珠やダイヤモンドは子どもたちの遊び道具として用いられるにすぎないのである。

## [様々なユートピアとその限界]

さらに我々は、たくさんのユートピア[作品]のなかからフェヌロンの『テレマークの冒険』だけを想起すべきである<sup>(三)</sup>。そこでフェヌロンは空想像によってフランス革命のイメージを、自由の理念だけでなく、平等の理念としても先取りした。我々の時代のデンマーク文学にも同様にユートピアが現れている。すなわちF・E・シベルンの『二一三五年』がそれで、著者は理想的な未来の状態を描いている<sup>(四)</sup>。[この物語によれば二一三五年には]ヨーロッパは社会主義的、共産主義的状态に入っており、[著者は]そこから古いヨーロッパを恐れおのきながら振り返るだが、それが現在のヨーロッパで、「不幸な私有財産制度があり、私有財産の体制と結びついた営業と職の困窮があって、それが万人にたいする万人の闘いの永遠の源で、その闘いが生活全体に貫徹し、そのことで生活は恐ろしく不正義に満ちた状態に浸かっていたのである。」よりよい状態への移行は暴力革命によって起こるわけではない。つまり、あらゆる理由から恐るべきものであった暴力革命によって移行が起こるわけではなく、むしろ、超自然的であると同時に自然的諸事件によって起こる。すなわち、一九世紀の終わりにヨーロッパの人間性<sup>(五)</sup>が、不自然的な状態に疲れ果て、精神的に衰弱麻痺して眠り込むという事件によって移行が起こる。不自然な状態のなかで、精神的生活および人間に価値を与えるものすべてがしだいに衰退していくからである。この眠り込みの後に至福の状態をもたらす覚醒と再生が到来するのである。

ユートピア的平等理念に溢れ、宗教的奇説に富むこの作品にたいしてどのような判断がなされようとも、深い人間愛の精神、人間の福祉と痛みを察する寛大な心による語りかけがあり、このこと抜きにこの作品を読むことはできない。そこでは、古いヨーロッパにたいする多くの回顧によって意義深く、的確な多くの考察がなされている。すなわち古いヨーロッパの自由競争や工場労働の状態、不幸な機械工の回顧、「この通商およびビジネスの制度、それは野心を叶えるための闘争場裏となること、他の人々を蹴落とし、他の人々を圧迫して押さえつけ、彼らの生活を歪めて、腐敗墮落した権力に屈服させること、消耗し魂を荒廃させること、あるいは、他の人々の具合を気にかけずにあらゆる種類の技巧や狡知を用いてまさしく大量に地上の富を獲得したこと、こうしたこと」(第一巻、二四九頁)の回顧によって意義深く、的を得た多くの考察を見つけてことができるのであり、この点を抜きにシベルンの作品を読むことはできない。「魂の平等は肉体の平等よりも重要で本質的である、あらゆる種類の身体的ことがらの要求のために、魂の福祉、魂の健康状態を費やし、押さえつけ、歪曲すべきではない」(第一巻、一三三頁)、「魂のよき状態が第一であり、最重要のもので、いかなる魂にも虐待を加えて損ねてはならない、少なくとも人間の魂の破滅を通じて大きな事業を企てるべきではない」(第一巻、一一二頁)という現代ヨーロッパでも支配的になっているだろう思考法にたいしてはただただ同感を禁じえない。とはいえ、新しい、よりよい社会状態の記述にかんしては、この作品は古いユートピアの [空想的な]状況記述と

同程度の妥当性を有するにすぎないのである。

たしかに、これらのユートピアを、現代的困難からの避難によって思い描く美しい夢と見ることができる。としても、我々は『ユートピア』や『二一三五年』のなかで、生きられるものとしての生がかなり退屈にちがいないというところに注意を引き止めることができるだろう。思い描かれたのは、牧歌的で静かで調和的な状態、そうだ楽園の状態であるが、しかし、そこに諸々の努力も、生の闘争も跡づけられてはいない。文化の進展とともに成長する生の諸関係の複雑化、展開はその状態にあってはかなり単純な、あるいはわずかな諸要素だけからなる関係に解消されている。我々が連れ戻されるのはいわば歴史以前の状態である。

歴史についていえば、歴史的発展や歴史的運命との闘争がユートピアで語られることはありえない。生の時間は今日も明日も同じように過ぎ去る。食べて、飲んで、寝て、働いて、学んで、音楽を奏でるとしても、何の混乱も生じない。しかしながら、我々が生の闘争に注意を向けるかぎり、外的実存のためのそうした闘争もまた、この地上の状態においてけっして完璧には消え去ることのありえない契機である。それらのユートピア物語に与えねばならない意義は本質的に、現存するもののもつ諸々の欠陥にたいして向けられる批判に基づくものであり、それらの物語で完璧なものが生きた仕方意識されていること、物語が諸々の要請を言明していることによる。物語の著者たちはそれらの要請が大まかな仕方で、また大きな制限の範囲内で、この地上に実現できることをたいへんよく理解しているのである。

### [革命的社会主義をめぐる諸問題]

ユートピア[思想]の提示した諸理念が生活の現実に直接的に導入されるべきだとすれば、そこには別の問題が出てくる。というのも、そこに革命的諸理念が発生し、社会にカオスのような混乱を導き入れる脅威となる。このことは、フランス革命の時代から今日にまでに頻りに現れてきた社会主義に当てはまる。純粋な共産主義はすべての物的財の恒常的な平等配分、私有財産法と相続法の完全な廃止を主張する。たしかに、ことばの特殊で党派的な意味における社会主義は、じっさいには私有財産や相続法の制限を要求していて、それらの廃棄を明確に主張しているわけではない。しかし、[元来の]社会主義はすべての私企業、私的労働行為の廃止を主張している。職業活動は、それを構成員に割り当てる社会に属するのであるから、各人に労働を割り当てるのは社会管理委員会であり、各人の労働は[直接的には]その人自身に何もたらさない。このことを達成するために、人間たちは、ある数の家族、つまりそのために建てられた壮麗な団体舎屋(ファランステール)で共に暮らし、共に働く諸家族からなるより大きな集団に分けられねばならない。ちなみにファランステールで人々はあらゆる人間的な活動に、とりわけ産業活動に携わるのである(フリーエ)<sup>(六)</sup>。

ところで、私的所有の革命的考察は「財産とは盗みである」(la propriété c'est le vol.) という有名なプルードン<sup>(七)</sup>のことばに表現されている。だが、この激しいことば

は、個々の財産占有者にたいする人格攻撃を意味するものではない。それが意味するのはただ、大多数の人々の妥当な要求が満たされていない普遍的不正義の状態の原因となる、劣悪な社会諸制度と社会的諸関係への攻撃を意味するにすぎない。しかし[その主張の]全体を支える人生観は先のユートピア物語におけるような倫理的なものではなく、本質的に自然主義的で、幸福主義的なものである。地上での感覚的享受が最高の善、最高の福祉であり、人生の目標であって、それは万人が分かち合うべきところにあるとされる。たしかにこの社会主義もまた宗教的性格を帯びて登場し、キリストを、すべての人間が平等であるべきだとする最初の社会主義者にとらえ、そのように言及した。この社会主義はドグマ的キリスト教ではなく、「君は君自身とともに君の隣人を愛しなさい」(サン・シモン)とすることで、世界を新たなキリスト教へと教化しようとしたのである<sup>(8)</sup>。

しかしながら、この隣人愛は隣人にたいして同様の感覚的享受、肉体的解放をめざすにすぎない。それはまた人々が自らの欲するようにふるまう、結婚からの解放でもある。ここで告知される神性はたんなる自然本性、あるいは万物の生である。その非宗教的核心は日に日に明らかになっており、キリスト教や教会にたいして敵意を露にしている。その隣人愛がどのように理解されているかは、一八四八年と一八七一年に現れた「赤い共和国」にはっきりと示されている<sup>(9)</sup>。それは弾圧されてしまったにしても、「豪華宮殿にたいしては闘争を、あばら家には平和を」という言説とともに蜂起するだろうという恐怖をヨーロッパに与え続けているのである。

この運動は恐ろしい性質のものではあるが、それでも、現存する不正義の状態、自由主義を後ろ盾として展開される不正義の状態にたいして相対的に正義を担保している。すべての社会階級のなかで、プロレタリアートつまり労働者階級あるいは第四身分<sup>(10)</sup>が、この上なく先鋭な仕方を経験してきたことであるが、フランス革命は、それが約束したことをずっと反故にしてきたのであり、このことは否定できない。たしかにフランス革命は政治的平等を導入した。しかし、プロレタリアートは、政治的平等が一七八九年以来起こったすべての革命によって今日まで社会的平等に資する成果を何も残さなかったこと、実質の生活財の享受の平等に資する成果を何も残さなかったこと、むしろ、社会的平等にかかわっては[政治的なものとの]相違が存在し続けていることを経験したのである。プロレタリアートは、いうならば自由主義が形式的な政治的諸権利によって社会的平等を実現せず、むしろそれを体裁よく取り除いたにすぎないことを認識した。それゆえに、社会問題がしだいに前景に現れてきたこと、政治的なものが副次的になったこととは、それ自体としてまったくよく理由づけられているのである。[政治的なものと社会的なものとの]相違は、流布している仕方では次のように表現できる。すなわち、政治的問題は誰が私を統治すべきかであり、社会的問題は、私が明日何によって生きるべきかである。この後者にたいする答えがないかぎり、政治的なものはすべて私にはまったく無関係である、政治的なものが仕事とパンを得ることの助けになりえないなら、私にはまったく無関係であると表現できるのである。

### [個性にたいする無理解]

しかし、革命的社会主義の大きな誤りは、その平等原理にたいする理解、つまり人間的個性がその原理によって完全に抑圧されるような理解にある。革命的社会主義が、すべての人間は同一の外的条件を保持し、同一の教育を受けるにすぎないとするならば、人間たちの差異は消失するだろうと思える。この観点で誤った社会主義はその大いなる反対者アダム・スミスの意見と一致している。スミスは個人主義者ではあるが、彼には個性の理解においては、彼が分業を論じるさいにいえる以上のものがなかった。すなわち、最も不均等な性格上の相違は、たとえば哲学者と普通の荷運び人との相違は自然的素質によるものであって、それが経歴やライフスタイル、教育によって熟するようには思えないといえるだけであった。しかし、そうした自然の素質についていえば、哲学者と荷運び人との相違はその天分や性向にかかわり、獐猛なマスチフ犬と獵犬との相違、あるいは獵犬とプードルとの相違、プードルとシェパードとの相違に比べて、その半分も違っていない<sup>[+]</sup>。だが、経験が多様な仕方ですすように、[哲学者と荷運び人は自然の資質として]違わないわけではない。我々は日常的に、同じ家族に教育され同じ親をもつ子どもたちが知的にも道徳的にもまったく違った仕方で発達するのを目の当たりにしている。それゆえ、先の社会主義が主張すること、すべての人間には同一の要求があり、同一の享受が必要であるという主張は間違っている。同様に、万人に同一の労働を割り振ることができるし、万人が同質の労働で暮らすことが適切だという主張も誤りである。こうした[誤ってとらえられた]平等原理と密接に関連して、誤った社会主義は社会を有機体と理解せず、この点で誤った自由主義と一致するのだが、社会を外的、機械論的に同一をもたらすにすぎない諸個人の集合体と解しているのである。

これにたいして、社会が有機体と解され、多くの身体を保持するひとつの身体と解されるならば、ここにはひとつの差異性が示されるのであり、より高次の活動と低次の活動との相違、高次の職業的位置と低次の職業的位置との相違を否定し、たとえば、荷運び人の仕事を芸術家あるいは詩人、科学者の営為とを同列におき、工場労働者の仕事を政治家のそれとを同列に置くことが滑稽であることがよくわかる。そのさい労働は様々な質をもつものであり、生活の諸要求や生活の享樂に必要なものも同様に多様なあり方をしているのである。

[誤った社会主義による]個性の克服は私有財産権の廃絶にもっとも鮮明に現れる。私有財産がなければ、この地上での生存において固有の生活、個人的、人格的生活は考えられない。各個人は彼が自分のものと呼び、彼の自由裁量に委ねられており、それにたいして、いわば彼が拡張された身体のようにかかわる世界の事物の総体を必要とする。そのような財産がなければ個人的人格の表示は不可能である。個人の実存は、個人的自己主張の諸々の手段や道具、つまり自分の個人的諸課題の解決のための手段や道具がなく、自分の個人的諸要求を充足するための手段や道具がなければ骨抜きになってしまう。一面的な社会主義国家においては、個別者自身

が自分の享受を選択できないのだから、個人の享受について語られることはありえないが、しかし、個人の享受が社会あるいは社会的リーダーによって[各人の]権利として主張され、割り当てられねばならないのである。

[加えて、]ここで述べたような財産権と相続権とは不可分に結びついている。相続権がなければ、人格的個人性は自分の将来にかんする関心を失うし、彼の労働の成果が彼の後継者の財になりうるような見込みをもたなければ、財を貯めようという関心を失うにちがいない。さらにまた個人的労働についても語ることはできないだろう。それは人間のこの固有性によって刻印された労働、それは同様に彼自らのイメージや神が彼に与えた固有の才能により、彼の実を示した労働なのだが、そうしたものについて語ることもできないだろう。というのも、労働は諸個人にたいして外的に指導組織によって割り当てられるからである。こうしたやり方は、怠惰な者が勤勉な者と同様に得るし、個人の才能や獲得された技量が評価されないのだから、まさしく情熱の衰弱をありうるものにする。たしかに、労働における精神を欠いた単調さを回避するために、労働者は自らの気分や嗜好にしたがって携わる様々な活動を取替えることができると提案されてきた(フーリエ)。しかしそのさい、諸々の活動を取替えることが分業と対立することが見過ごされている。分業において達成されるはずのものは、特殊な労働領域の名人、巨匠の輩出である。まさに特殊な労働が専門的に営まれるがゆえに、名人や巨匠が輩出されるのである。

とはいえ、同じ労働者が、大きな相違のある諸々の行動に携わるさい、[フーリエのように]何がしかの時間の経過後に一方の行動から他方の行動へと移るべきだとするのなら、労働はいったいどのようになされるのだろうか。この点はたしかに、[先に紹介した]シベルンの『二一三五年』で言及されている。

「毎朝が仕立屋で、昼には桶屋か木工旋盤の職人、夕方には給仕か音楽演奏家、なぜこうしたことが行われてはならないのか。」

それはたしかに許されるが、しかし問題はどのように行われるのかだと我々は答える。同様のことは新コペンハーゲン・の生活(『二一三五年』一四一頁)のなかでいわれることにも当てはまる。

「同じ男ないし女が、ある日は仕立屋か桶屋を営み、別の日には公共の合唱隊に参加し、俳優として役を演じ、あるいはフランス語か英語、スペイン語の教師として子供たちを教える。」

我々は、すべてこうしたことがユートピアにおいては卓越的になされることを疑わない。そこでは高等教育[機関]の教師(教授)が一日のある時間には郵便配達人として出かけ、[専門的な]郵便配達人が[高等教育機関に]出かけて行って、[外に配達に出かけていない]他の教師のある者から良質の講義を聴いて彼らの精神の糧とし、リクリエーションを行うといった具合でもあるのだ。だが、我々は現実世界においてそれはどうなのだろうかと疑う。諸々の個性はこうした仕事の転換によって、自分自身と関係し一致する個性であり続けることができるだろうかという点を疑う。このような[一面的に]

社会主義的で共産主義的な国家において、個性にたいする配慮がどれほど乏しいものであるかは、とくに家族生活が解体されていることによっても同様に示される。というのも、[そうした一面的な社会主義国家では]私有財産が廃棄されれば、家族生活もまた、それが与えるすべての個人的充足とともに廃棄される。相互に信頼しあい意思疎通のある人々の家庭生活、相互援助、個々の家族の守り神が投影されている独自の生活スタイル、もてなしと親愛さ、家族の諸々の小さな祝祭、困窮した人々にたいする慈善、すべてこうしたことは、先の[一面的な社会主義]国家には見ることができない。そこでは公的住民である多くの家族が、兵舎にいるような有様の共同生活を送っており、彼らは管理諸組織によって準備される大規模な共同の食事に集合し、共同の労働を行い、子どもたちは親から引き離され、公教育や育児施設に手渡されるのである。

### [問われる人倫的人間観]

ここに主張される国家が現実のものとなればなるほど、それがめざすものとまったく矛盾していることが明らかになるだろう。その国家は、過剰人口が確実に到来し、そのさい十分な生計手段が欠乏するという特殊な[国家の存在]理由からしてすでに、矛盾にいたるだろう。たとえば、家族や子どもたちのケアにたいする人倫的観点が[生命の]再生産を制限しない。家族と子どもたちのケアが、万人が同一の享受と同一の労働を得るべしとする社会に手渡される。誰も自らの人倫的家政に責任を負わない、人間たちを無制限に再生産する人倫的家政に責任を負わない。あるいはミラボー<sup>(+)</sup>が表現したように、人間が鼠のように再生産される。もしこれらに見られる事態が起こるとすれば、国家はそれがめざすものに矛盾するようになるだろう。これら多くの地上の住人たち、かの[一面的な]社会に包摂され、まずは消費者でなければならない多くの地上の住人たちは、生産者の側に回る前に、諸々の必要を増大させるだろうし、その事態の帰結は万人が等しく良好な生活状態になるのではなく、万人が等しく貧困に、すなわち窮乏した惨めな状態になることだろう。約束された幸福は反故にされ餓死にさえいたるだろう<sup>Ⓜ</sup>。この国家が目標とするものとの矛盾にいたる一般的理由は、人間本性に宿る罪をまったく無視し、あるいはせいぜい人間本性の罪をごく表面的に考慮するにすぎないことである。産業国家において人々が、生活諸財を分配し、万人に彼らの労働を指定する役職を負う権威当局者の位階的上下関係に満足するようになることが現実に考えられるだろうか。不正義の取り扱いを契機に一般的不満がすばやく沸き起こるであろうことが洞察できないなら、さらに諸々の新しい変化を通じて必要な改革を促すように諸々の要求が生まれてくるであろうことが察知できないなら、それは人間本性にたいしてまったく無知の状態であるにちがいない。すべてのこれらの労働者が同じように誠実かつ勤勉に働くだらうとでも思っているのだろうか。これらの労働者のなかに、不誠実で怠惰な者たちは多くはないとでも思っているのだろうか。ちなみに、不誠実で怠惰な者たちは同じ享受にたいしてさらに要求をするのだが、これにた

いは、「働かざるもの食ふべからず」という巧みな言い回しがあるのだ。すなわち、現在の自由主義国家に対抗して社会主義者たちが理念的な仕方、富める者が貧しき者(労働者)の犠牲のうえに暮らしているという不平不満を投げつけるとすれば、[一面的]社会主義者によって企図された国家にたいしては、怠惰な者が勤勉な者の犠牲のうえに暮らしているという不平不満を宛がうことができるだろう。

## 第四章 倫理的社會主義

### [倫理的社會主義とは何か]

こうして、我々の時代にあってまさしく相対立している両極端の方向を考察してきた。[その考察はまず、我々を]アダム・スミスへと振り返らせる極端な個人主義、混乱が日に日に高まってはいるが基本的にはまだ現存社会を支配する極端な個人主義に向けられ、[次に]革命によってその社会を脅かす極端な社会主義に向けられた。どのようにして後者が今後発展するのかは、まさに今日の時代が示すにちがいない。だが、我々は、両極端の真理であるものを統一し、社会の権利と個人の権利との両方を止揚する社会状態に向けて努力が重ねられるべきだという考えを捨てることができない。[つまり]空想的で革命的な社会主義とともに、倫理的社會主義、すなわちキリスト教的社會主義もまた存在するのである。キリスト教は我々にユートピアを与えはしないし、地上において完璧の状態を説きはしない。倫理的社會主義が我々に教えるのは、完璧なものを彼岸に求めることである。だが、倫理的社會主義は地上の困窮や悲惨と闘うよう我々を支援し、神の国と、同時にまた、精神性を含むだけでなく身体性をも含む人間性の国が到来しうることを、地上における前進が得られることを期するものである。

倫理的でキリスト教によって規定された社会主義は、人間的諸状況にたいして、それらが地上での諸制限のもとで与えられている状況にたいして配慮の目を向ける。それは[一方で]保守的で[社会の]変革には乗り出さないが、その再構成には創意を發揮する。それゆえ私有財産権と相続権を確保し、それとともに[他方で]、理念的に革命的社會主義にとって歓喜の対象である諸々の自治集団や基金、施設に帰属する財産権をも確保する。倫理的社會主義は、まさにそれが連帯の法則を認識するのだから、ことばの正しい意味として個人主義的である、すなわち、何らかの個人を配慮の対象から排除しないし、自由主義に反して、個別者に「自助」と競争とを仕向けることを社会の義務にしないのだから個人主義的である。倫理的社會主義はそのような社会状態を自らの課題とするのであり、その課題において、働く意思のあるいかなる個人も日々の糧を見つけることができなければならない。キリスト教は、人間が樂園を離れねばならなかったので、人間にたいして語られた「君は額に汗して、君のパンを食

べなさい」という古いことばを証しだてる。しばしばこのことばによって人間的労働にかけられた呪い、労働は艱難辛苦と一体であるべきだという呪いに重きが置かれ、このことがまたいかなる人間的労働あっても、精神的労働にあっても示される。しかしながら、そのことばが[真に]意味するのは、[じっさいに]働いている労働者もまた、その糧を得るべきだということであり、そのことばが語るのは、「君は額に汗して働くべきであるが、食べるものを得てはならない」ということではない。キリスト教は同様に、労働者は賃金を受けるに価すると我々に教えるのであり(「ルカによる福音書」第十章)<sup>(1)</sup>、労働と賃金との正しい関係があるはずだと主張する。キリスト教は利己的な雇用者にたいして「見よ、諸君が労働者に与えずにおく労賃が叫んでいる。収穫の民の叫びは万軍の主の耳に入ったのだ」と非難するのである(「ヤコブの手紙」第五章)。

そして我々がとくに主張しなければならないことは、世界の救世主[キリスト]が我々に教えるのは、我々の父[なる神]に日々の糧、パンを祈願することである。そこで、我々が諸々の条件を満たすならば、日々のパンもまた与えられるだろうということが存する。しかし、我々が考慮し、尊重すべきは次の点である。すなわち主はこの祈願を行うことを我々に教えたが、それが個人主義的にではなく社会主義的に、「今日我々に日々のパンを与え給え」と祈るよう教えたのである。キリスト教がある民族に浸透させたのと同じ目標において、この祈願もまた万人によって連帯の絆とともに祈願され、同様にして、万人によってその祈願の成就に向けて労働が行われもするだろう。この祈願成就にたいする諸々の障害物は個々の個人のなかに、怠惰と浪費のなかにありうる。だが、それらの障害物は社会のなかに、悪い諸制度、理にかなわない諸制度のなかにもありうる。それらは万人が食えるようになるよう改良されねばならないだろう。

こうして日々のパンはたしかに様々な人々に様々な[仕方で与えられる]ものである。ここには無限の多様性がある。だがしかし、救世主[キリスト]が我々に教えたのは日々のパンを祈願することであるから、彼はまた我々に、この祈りが我々の主における他の人々の諸々の祈りと分かちがたく結びついてなされることを説いた。ここに、キリスト教的理解において、ある者は、たとえ窮迫した状況にあるとしても、他の人々の祈りの成就のために祈り、働くことができなければ、彼は日々のパンを得ないということがある。こうして日々のパンを得ること、餓死との闘いが日々なされねばならないこと、心の内を占めるのがもっぱら地上の生存のための闘いであること、精神的なもののための時間と空間は生まれぬこと、[たんに]これらのことが、日々のパンが主の祈りから必ず導き出されるという意味で日々のパンを得ることではない。この[日々のパンを得る]ことによって我々は神の実験や不可思議な神意と見なされるものを拒否するのではない。ここで我々が語るのは、主の祈りから社会考察のために導き出される倫理的諸観点にかかわるものである。我々が語るのはただ次のことである。すなわち「君の名を聖化したまえ、したがってその名は安息日を神聖に保つことができ、毎日曜日にあくせく働いてはならない」という要求を満たして働くことができる者だけが、日々のパンをキリスト

的意味において得るということである。同様に、その者は、(我々の内部においても我々の周囲においても両方とも)「君の国に帰属せよ」という要求のために働くことができる者であり、彼が彼の地上の召命[としての職業]を営むことで、彼の家族に、あるいは彼が隣人と呼びうる人々の圏域に神の国が到来するためにも働くことができるのである。

### [倫理的社会主義の綱領]

そこで目標はその[ようにして働く]労働者を支援して中間階層に参入させること、彼の実際の家族生活、つまり一個人の特殊な生活にとって基礎になる現実の家族生活を援助すること、彼を援助し、何がしかの保障による未来を整えること、高齢期や失業時、疾病時のケア措置を講じることである。我々は地上の生存において、我々が完璧な保障を保持することもできないし、保持すべきでもないことをよく知っている。たとえば農民はいつも前年に収穫見通しをたてて計算し、次の夏に収穫するのだが、しかし、いかなる意味でも将来の見通しや計算ができないほど生存、生活が不安定な者、外的生活や生存が損なわれて不安定で、堅実さや支柱が欠けている者は内面生活においてもまた、堅実さや支柱に欠け、浮遊した不安定なものになるだろう。それゆえ、我々はただ清潔で風通しのよい労働者住宅が家族の棲家になること、ケアのための基金が整備されることを歓喜しながら見ることができる。すでにこれまでなされたことが窮乏を救うのに十分だとは到底いえないが、ここに示されるのはその成就を要求する倫理的思考であるにすぎない。さらに労働者の啓蒙、たんに宗教的、人倫的であるだけでなく、技術的啓蒙、[技術的陶冶]にたいしても配慮がなされねばならない。すなわち、労働者が自らたんに機械の一部にとどまり、彼が協働して仕上げる仕事への洞察を欠くべきではないこと、労働者が諸々の生きた原理や規則を自ら身につけるようになることで、自ら独立的な仕方で事業に乗り出せるようになること、こうした技術的啓蒙、[技術的陶冶]にも配慮がなされねばならないのである。

さらに我々が、この目標はいかにして達成されるのか、その手段を問うならば、私的な福利に言及し、キリスト教的愛の精神のなかでの雇用者と労働者との関係を参照することが近道である。そのさい少くない雇用者が、労働者を援助し人間にふさわしい生活を送らせるために大きな犠牲を払ったことは忘れられてはならない。だが、これほど大きな課題の解決はたんに個人や偶然に委ねられうるものではなく、より普遍的で信頼できる諸組織や諸制度による努力もまた払われなければならない。このことで我々は労働組織についての思想、すなわち諸々の労働者団体の思想へと導かれている。しかも、諸々のユートピアはこの[労働組織の]思想に最初に言及している点で大きな長所を保持しているのだが、それでも[我々は]、ユートピア的意味において[その思想に]導かれているのではない。むしろその思想が実践的に成就されるという意味で導かれているのである。そのような労働者団体の形成のために、自助努力(シュ

ルツェ・デリッチュ)と国家支援(ラッサール)との両方に言及がなされたのである<sup>(二)</sup>。こうして、個人にとってはその生存手段の獲得がいつそう安価になる利用団体あるいは消費団体が提案されたし、それと同様にして労働者たち自身が同時に労働者であり雇用者であるという仕方で事業を営み、彼ら自身が労働を結びつけるといった目的をもつ生産諸団体もまた提案されたのである。

ここでたしかに、労働者たちがどのようにそれらに必要な資本を調達すべきなのか、彼らがどのように大資本家たちとの競争に耐え抜くべきなのかといった点の困難さも明らかになる。そのために、そのような[労働者諸]団体には、有能で洞察力に富む指導者がいなければ立ち行かないだろうということもわかってくる。ラッサールにより労働者に普及した悲しい幻想がある。すなわち、労働者は指導者や権威なしでも労働することができる、上下関係の秩序はもはや存在すべきものではないといったものである。ラッサールの教示によれば、国家はそれにもかかわらず、信頼できるトップのいない[フラットな]多頭の諸団体に大量の資本を注ぎ込むという。さらにひとつの秩序が提案され、それによって労働者たちは賃金とともに、利益のある部分を分け前として配分すべきだとされた。最後に賃金関係の秩序が要求されたのだが、すべてこうしたことは国家支援を必要とするのである。

こうしてたしかに、多くのことがここでもなお不明瞭なままで、まだその決着の形態を得てはいないが、しかし、まずはその形態の探求の途上にあることが認識されたにちがいない。とはいえ、現代の困窮のもとにあってしだいに切迫し、日々いつそう緊急性の度合いを増しているのは、国家がこの社会の大きな諸課題にたいして、古い自由放任(laissez aller)のままにはとどまりえないこと、もはや世界が自動的に進歩することによって慰められないこと、むしろここで国家が介入し、[社会との]力強い協働に踏み出すべきであることの認識でなければならない。国家がまだアダム・スミスの教示に従うべきだと考え、どんな介入も控えるべきだとするかぎり、次の問いが考察されねばならないだろう。すなわち、絶対主義国家が一七八九年以前に第三身分にたいして責めを負ったのと同じように、今度は自由主義国家が怠慢で第四身分の諸権利を黙視することで責めを負わないのかどうか、何によって自由主義国家は周知の結果を被るのか、自由主義国家の怠慢が[絶対主義国家と]似た諸結果を導くことがありえないのか、自由主義国家が絶対主義国家よりいつそう悪くならないとしても、後者と同様に恐怖に満ちたものにならないのか、これらの問いが考察されねばならないだろう。

### [ユートピアを踏み越えた社会改革]

ここで我々は、この領域での社会改革が独自に歩みを進め、ユートピア的梦想家たちに身を任せない方向だけを示唆するだろう。とはいえ、我々は、立法が手工業者や労働者を保護し、彼らに傘を提供すると主張される場合、それをユートピアだと見る

ことができないだろう。そのことは、国家が[上から]彼らに諸々の規制や秩序を強制すべき

だという意図ではなく、自由な労働者たち自身が諸々の規制や秩序を自分たちおよび国家に課すべきだという意図からであり、そこで労働者自身によって制定された諸々の団体規約やアソシエーション規約、労働秩序といったもの、これらのものが機能するのであり、それらが労働者たちを法の保護のもとに組入れるのである<sup>⑩</sup>。そこで以前の同業者組合ギルドや職業団体コルポラチオンに相当するものが、ここでは[論及を]省かねばならないすべての過去の協同組合とともに、現代的形式で登場する。ちなみに、そうした以前の諸々の組合は人倫的生活にとってかなり福利的な意味を担っていたのだが、ここではそれについての論及を省く。社会主義者は[狭い意味での]それ自身の目的に反して、他の社会諸階級の団体的諸権利に分類されるものすべてを得るために奮闘している。というのも、社会におけるコーポラティブな要素、協同的要素の無力化状態を継続するのではなく、むしろその要素の更なる発展によって、労働者が援助されるはずだからである。我々はすでに多くの場で実施されていて大きな働きをしていることがらもまたユートピア的と見ることはできないだろう。すなわち、国家が法律によって労働時間を制限し、とくに日曜労働を禁じることで安息日を保障すること、国家が女性や児童の労働雇用のための法律を制定すること、労働者が健康に良い場で働くように配慮すること<sup>⑪</sup>、これらのこともまたユートピア的と見ることはできないだろう。さらに我々は労働者と雇用者の提案や協議によって労働者の賃金が折々に国家によって秩序づけられ規制されることもまた、ユートピア的と見なすことはできず、むしろ現実的關係に向かう経過的なものであり、諸々の[保障の]ネットを修理し、自由競争の結果生じる多くの他の困難にも備えることに役立つと見なすことができるだろう。というのも、イングランドに生まれた、自由選挙による仲裁裁判官たち(boards)に介入的なことがらはほとんど期待できないからである。これらのことすべてによって、労働者の關係は法權利によって秩序づけられ、彼らは社会のなかでの無權利の者たち、恣意性と偶然性に委ねられた者たちとして暮らすことはなくなるであろう。国家が海事法や商法、為替法を保持するなら、国家の労働法制定が不可能ということがどうしてあろうか。我々はまた、国家が労働者のために税負担を軽減し、たしかにラッサールのような無制限の要求に基づいてではないが、しかし、国家が多くの私企業を支援するように、限定的な目標で労働者を支援することも、先の[法權利にしたがう]諸關係の本性と一致すると見なければならぬ。たとえば、生産的諸団体が現実に活動している場合には、国家がこれらの諸団体の諸々の機械等々の購入を援助するということがそうである。さらに、資本の支配の制限、貨幣の支配(プルートクラシー)の制限、あるいはルターがすでに表現したように、フッガー家やそのような諸々の会社の口にばくろをつけて制御すること、株式詐欺や高利貸の抑止、利率の固定、これらのことを我々は正義に基づき、公共の福祉という関心に基づくものと見なければならぬ。古代から暴利は非キリスト教的と見なされており、そのことをたんに教皇だけでなく、ルターもまた確認している。これにたいして、競争が無際限の自由を与える場である近代の諸々の国家では、暴利取締法が廃止され、利率は野放しにされている。

だがしかし、国家が暴利取締法を廃止し、にもかかわらず、生じた負債義務の履行を強制する役割を引き受け、高利貸たちの要求を実現することで高利貸の下働きになること、こうしたことは矛盾として認識されねばならないのだ。R・メーヤーはこの問題点にかんして、「君はえられるかぎりの多くの利子を得なさい。しかし、私は私の権力手段によって四、五パーセントを君のために取り立てます<sup>[+四]</sup>」と書くことで、国家が自由主義に譲歩しうることに注意を促しているのである。

### 〔国家支援と自助努力、自己陶冶へのキリスト教の役割〕

ここで示唆したあれこれの個人について、様々な意見がありうるだろう。我々はこの社会綱領を政治的に提案しているのではない。それは技術的な才能に長けた人々に委ねられねばならないし、個々の国での特殊な関係や状況を考慮しなければならず、さらに国際関係もまた考慮に入れなければならない。すなわち、ある国でラディカルな諸改革が労働者保護のために行われる場合、その国は、それに対応する改革が導入されていない外国との競争に耐えることができないだろうことはわかる。だがしかし、これらの〔労働者保護の〕改革の必要性は、それに根拠があるかぎり、どこでも妥当なものになるであろうことは疑いえない。また、社会の一領域の原理的変化が、それに対応する社会の他の諸領域の原理的変化を引き起こすだろうこともわかることである。ここでの基本問題は、国家支援が一般的に倫理的要請として立てられるかどうか、ただこのことであるにすぎない。この要請によって国家は、ここで基本的に示されたことと別の方向に歩むことができるだろうかという問い、この問を回避することができないし、回避すべきでもないのである。

しかしながら我々はまた、国家支援から自助努力へと連れ戻されもする。我々はこの自助努力について考えよう。それは〔一般的には〕いかなる人間も行わなければならないのだが、誰も自分ではできないことがある。〔たとえば〕自己教育を、つまり各人が自らの諸々の悪しき性向を克服し、自己自身を人倫的人格へと形成・陶冶する自己陶冶について考えてみよう。労働者やプロレタリアート全体もまたこの自助努力を必要としている。だが、彼らはそのために援助されねばならず、下支えや道案内を必要としている。彼らが神やキリストを否定する理論にかかわり続けているかぎり、彼らによって、有害で人倫を蝕むすべての思想の放棄がなされえないかぎり、すなわち人間には地上的使命があるだけで、地上を越えた使命がないという思想、人間が生という短いスパンの時間のなかでその目標を求め、感覚的享受の最大可能な総計を得ようとする思想、そうした思想を労働者やプロレタリアートがもつかぎり、彼らの援助は不可能である。彼らの諸々の欲望<sup>(3)</sup>はけっして満たされないし、各人の職業の根底にあって生の充足のための必要条件である慎ましさが、彼らの魂にしっかりと根を下ろすようになることはありえない。このさい〔労働者への〕支援が唯一可能なのがキリスト教であり、キリスト的信仰、キリスト的的人生理解である。というのも、非宗教的な国民経済学者によっては慎ましさや中庸、勤勉さや儉約が勧められることはほとんどない。労働者

が同時に、それらの徳への、それ自体形式的な徳へのより深い人倫的、宗教的な諸々の動機を欠いている場合、そしてJ・スチュアート・ミルによる幸福以上の高い道徳原理の立ち上げが知られていない場合<sup>(四)</sup>、国民経済学者によってそれらの諸徳が勧められることはほとんどないからである。中庸や儉約にかかわる説教に付随する、そうした幸福よりも高い道徳にたいして、労働者が「人生は短いが楽しい(食って飲んで、次の日には死んでいることを許したまえ)<sup>(五)</sup>」(「コリントへの第一の手紙」第一五章)と語るとき、そこにはつねに彼らにふさわしいものがあるだろう。だが、キリスト教が、貧しき人々への福音、それによって唯一援助のできる貧しき人々への福音とともにあるなら、教会もまた社会的課題の解決に協力して本腰を入れている。そのさい、カトリック教会は少なからず役割を果たしている。たとえ同教会がその性格から労働者のあいだで宣伝活動を行っていたとしても[社会問題の解決に役割を果たしているということができる。]労働者問題にたいする同教会の関係は、この教会の近未来への前進のための[戦略上の]現実的諸手段の一つだとあえていおう。だが、同教会が多くの労働者団体のなかで、よりよい精神を、無神論的教理と闘い、それを克服する精神をもたらしたこと、労働者団体の諸々の事業活動を助言や行為によって支援していることは、同教会にとって名誉なことである。

この点でプロテスタント教会は立ち遅れているのだが、たしかにそのことにはある意味で理由がある。我々にはカトリック教会のように団体としての自立性がないだけでなく、物的諸手段もないことがそれである。だが、プロテスタント教会は遅れたままの状態であってはならない。ここには広大な領野が「国内伝道<sup>(六)</sup>」のために開かれている。ことばだけで、つまり説教だけではたしかに不十分である。労働者の物質的利害関心にまで足を踏み込まなければならない。労働者は彼らの状況改善のために、精神的道案内と同時に現実的援助によっても支援されねばならない。我々の救い主[キリスト]は砂漠で五千の人々を扶養したのであるから、彼はたんに彼のことばによって精神的に人々を養っただけではなく、身体的にも彼らを満足させたのである。貧しき人々が必要とし、我々すべての者が必要としているのはこうした二重の扶養なのである。

### **[人間的な機械の使い方、産業やケアのあり方]**

こうして、我々は倫理的社会主義のもとに我々が理解するものを提示するよう試みた。我々はそのような社会主義の諸要素を示唆したのであるが、[たしかに]この社会主義そのものを完璧なイメージで提示したのではない。すなわち、ユートピア的なものに迷い込んで始めて瞬時に可能なイメージで提示したのではない。このことを我々は喜んで認めよう。地上で原罪や無常、死が存在するかぎり、完璧な状態などは確立することができないだろう。だが、社会関係の倫理的理解や取り扱いが浸透すればするほど、よりよい状態は期待できるだろう。解決できない諸課題がつねに残るし、誰もそのことを疑わないとしても、我々はさらに個々の事例によって説明しよう。我々がこれまで、工場労働者の状態改良のために主張したことすべてが達成されたとしよう。

しかしそうすると、[労働そのもののあり方が、すなわち]工場での機械による労働が画一的で精神を欠き、喜びの伴わない労働であるという、大いに困った状態がまだ後に残されるであろう。しかし、人間はその労働を強制的義務として、あるいはたんに食料を手に入れる手段として行うべきでないこと、それだけでなく、人間はその労働を喜び、楽しみながら行えるはずだということ、そのなかに人間の固有性がありうるはずだということ、こうしたことは倫理的な要求であり、それはたんに機械的工場労働、機械労働ではなしえない。[だが、こうした状態がまだ残されているのである。]

しかしながら、我々は自然支配においてもまた進歩を信じるのだから、工場制度の進歩がいつそう遅れ、手工芸や手工業がいつそう進歩するようになる時代が到来するという問題を付け加えることが許される。手工業は諸々の新しい発明、考案によって機械をこれまでよりもはるかに広い範囲で用いるようになるだろうから、手工業がいつそう進歩するようになる時代が到来すると考えるのはユートピア的だろうか、という問題である。たしかに今現在は人間が機械に奉仕するだけで、人間自身が機械の一部になっているのであるが、しかし人間と機械との関係は、低次の、たんに機械的で純粋に精神を欠いた労働の部分から人間を解放することで、機械が人間に奉仕すべきだということ、このことであろう。いったい、この即自的に理性的なものもまたいつの日か現実になるだろうと推測するのはユートピア的であろうか。人間がその労働から楽しみと喜びを得られ、芸術とも類縁のある手工芸、手工業に大いなる未来が開かれると推測するのは、そして本来の工場労働が巨大な生産に限定されるだろうと推測するのはユートピア的であろうか。

そして、このようなことが達成できると考える場合でさえ、我々はつねに、「君たちは貧しき人々がいつでも君たちのもとにある」(「ヨハネによる福音書」第一二章)という主のことばのなかで意味される一般的考察に連れ戻されるであろう。いつの時代でも、貧しき人々のケアを引き受けることが社会の課題になるだろう。あらゆる時代に通用するように、貧しき人々の貧困や困窮状態を緩和するだけでなく、その貧困の原因を取り除くような対策によって貧しき人々のケアに当たること、そうしたルールを我々は設けることができるだけである。ケアは、それが労働技能をもつ貧しき人々を就業させるような対策によって、その課題の解決を図るだろうし、過剰人口に制限を設けられるような対策によって課題の解決を図るだろう。[公的でない]私的福祉についていえば、それは、貧しき人々にたいする現実的人格的關係が入り込まないかぎり、貧しき人々の状態を調査できる諸々の団体によって、たんに宗教的、道徳的に彼らに働きかけるだけでなく、彼らに仕事の提供もできる諸団体によって行われるのが最良であろう。原理を欠く、非人格的な慈善活動は多くの場合ひどいことになっている。なぜなら、そうした活動は貧しき人々を援助するだけで、物乞いや犯罪者のような彼らの生活を継続させるだけだからである。

## 原注

- ① アダム・スミス『諸国民の富』第一編第一章(ドレビュによるデンマーク語訳、一七七九年)十頁以下参照。なお、ロッシェン『国民経済の基礎』(Roscher, *Die Grundlagen der National- oekonomie*)一二一頁、参照。
- ②『諸国民の富』デンマーク語訳、第二巻、四二頁以下。
- ③ヴァルクス編『ルター著作集』第二二巻(*Luthers Werke*, Walchs Udg. X XII, S. 319.)参照。
- ④『ルター著作集』第十巻(*Luthers Werke*, X, S. 1119.)参照。
- ⑤『ルター著作集』第十巻(*Luthers Werke*, X, S. 394.)参照。
- ⑥ライシュル『労働問題と社会主義』(Reischl: *Arbeiterfrage und Socialismus*, 1874, S.72. ), ペリン『製造業における児童の雇用労働』(Périn: *le travail des enfants employés dans les manufactures*, 1874.)を参照。
- ⑦F・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』(一八四八年)。
- ⑧シェッフレ『資本主義と社会主義』(Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S.426. )、プレーナー『イギリスの工場立法』(Plener, *Die englische Fabrikgesetzgebung*, 1871.)を参照。
- ⑨ルドハルト『トマス・モア』(Rudhart: *Thomas Morus*, S.122ff.)、マルロー『世界経済システム』(Marlo: *System der Weltoekonomie*, B.1, 2den Auf, S.449ff.)。
- ⑩『諸国民の富』デンマーク語版、第一巻、二六頁。
- ⑪マルロー『世界経済システム』(Marlo: *System der Weltoekonomie*)第一巻、第二版、五一六頁。シェッフレ『資本主義と社会主義』(Schäffle: *Capitalismus und Socialismus*)二〇一頁。
- ⑫ルドルフ・メーアンの『第四身分の解放闘争』第一巻 (Rudolph Meher: *Der Emancipationskamp des vierten Standes*, 1, s.71)で、司教座聖堂参事会員ムーサン(Mousang)は彼の選挙民にたいしてそう語っている。
- ⑬デンマークではこの点で一八七三年五月二三日の法律によって、児童や若者の工場労働等々にかんしてたいへん考慮に価する端緒が開かれた。
- ⑭メーアンの『第四身分の解放闘争』第一巻、七八頁を参照。

## 訳注

### 序

- (一)「より大きな全体の一部」とは、このテキストが後に『社会倫理学』(一八七八年)に収められ、著者の『キリスト教倫理学』(一八七一～七八年)体系のなかに位置づけられることを意味する。

## 第一章

- (一)ここでの「公共の福祉」は<Almeenvellet>の訳語。文字通りには「共通の福祉」といった一般的な意味であり、独語版では<das Gemeinwohl>の語が与えられている。
- (二)この思想はイギリスの思想家であり、功利主義者で知られるベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)のものである。じっさい、彼は倫理的価値を量化してとらえることを試みた。
- (三)「よき生活状態」は<Velstand>に与えた訳語。
- (四)「能力・資産」は(Formue)の訳語で、客体的であり、かつ主体的な富を意味している。
- (五)アグール(Agur ben Jakeh)はヘブライ語聖書の『箴言集』三〇の編集者。
- (六)この詩は、著者マーテンセンにも多大の影響を及ぼした近代デンマークの思想家グルントヴィ(N. F. S. Grundtvig, 1783-1872)の作品「はるかに聳える山々」(一八二〇年)の部分からとられたもので、今日ではグルントヴィの社会プログラムといわれることもある。しかし、独訳ではなぜかこの詩自体が省略されている。ドイツ側からみた場合、グルントヴィはさして重要な思想家ではないと見なされ、さらにはデンマーク・ナショナリズムの象徴であるという理由で忌避されたのかもしれない。
- (七)この点では、訳注(六)で紹介したグルントヴィが「モーゼ・キリスト的直観」(mosaisk-kristelig Anskuelse)等の類似の規定を与えている。なお、グルントヴィ「普遍史的哲学・学芸」(小池直人訳『生の啓蒙』風媒社)を参照のこと。
- (八)「王の魂」(kongelige Sjæle)で著者が何を念頭においているのか不明だが、プラトン哲人王のような精神的エリートについていわれているのかもしれない。
- (九)シラー(Friedrich Schiller, 1759-1805)は、盟友ゲーテとともに古典主義を代表するドイツの詩人、劇作家。ベートーヴェンの交響曲第九番「合唱付き」の原詩者としても知られる。ここで引用されている詩は『ギリシアの神々』(*Die Götter Griechenlands*, 1788)からのものである。
- (十)アリストテレスの奴隷についての見解は『政治学』第三章～七章を参照。
- (十一)トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805-59)は『アメリカの民主政治』『旧体制と革命』などで知られるフランスの自由主義的な政治思想家。
- (十二)マモンはキリスト教にとっての七つの大罪のひとつに数えられる強欲を司る悪魔。元来は古代ギリシア語で富や財を意味した。
- (十三)キンキンナトス(Lucius Quinctius Cincinnatus, ca.520-430BC.)は執政官として、また独裁官として共和政ローマに仕えた貴族であり政治家。謙虚で徳のある人格として語り継がれる彼は自ら農作業を行っていた。彼は戦時に独裁官となるが、敵を打ち破った後ただちに独裁官の役職を返上し、農作業に復帰したとされる。

- (十四)キケロ(Marcus Tullius Cicero, 106-43 BC.)は共和政時代のローマの政治家であり哲学者。『弁論家について』などの著作がある。
- (十五)パウロ(Paulos, ?-65)はイエスの一二使徒の一人であり、初期キリスト教の最大の理論家。新約聖書の著者の一人としてキリスト教発展の基礎を築いた。
- (十六) 新約聖書にはパウロによる「テサロニケ教団への手紙」が収められているが、そのテサロニケ教団とはパウロがはじめてマケドニアのテサロニケ(おそらくコリントス)の地で布教して形成した教団のこと。なお、都市名のテサロニケの大元は人魚伝説でも知られるマケドニア王国の王妃(Thessalonike, 345-295 BC.)であった。
- (十七)ストラスブール聖堂は、フランスのストラスブールにあり、ゴシック建築で知られるカトリックの大聖堂。
- (十八)ギルド。中世から近代にかけてヨーロッパの諸都市の同業の商工業者のあいだで結成された職業組合。
- (十九)「人倫的」と「倫理的」に対応する原語はそれぞれ〈sædelig〉と〈ethisk〉であるが、ほぼ同一の意味と考えてよい。ちなみに「人倫的」はカントやヘーゲルなどドイツ哲学の文脈でも用いられる。だがここではカント的形式倫理の意味ではなく、むしろヘーゲルの実質倫理が念頭に置かれていると考えてよい。じっさい、著者マーテンセンはヘーゲルの〈Sittlichkeit〉の思想からの多大な影響を被り、独自のキリスト教倫理を展開したのである。

## 第二章

- (一)アダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)は『諸国民富』(『国富論』)の著者として知られるスコットランド生まれの経済学者。しかし、彼は道德哲学者として出発し、大著『道德感情論』の著者でもあるので、マーテンセンが倫理的なものに無関心とするのは明らかに誤解か、ことば足らずである。誤解という面では、当時スミスの名声が経済学の方面でだけ知られ、道德哲学の著作が知られていなかったことに由来すると推測もできる。ちなみに、スミスの『諸国民の富』(とマルサスの『人口論』)は一九世紀の早い段階でデンマーク語に翻訳されていたので(K. Philip, *Staten og Fattigdommen*, Gjellerup, 1947)、著者マーテンセンがもっぱらこの情報に依拠してスミスを理解していたことは大いにありうる。他方、ことば足らずというのは、著者がスミスの『道德感情論』を知っていたとしても、それを自然主義原理に基づくものにとらえ、精神的倫理性を否定したと確信をもって判断した可能性もある。だがいずれにしても、テキストのような断定だけでは、読者に誤解を呼び起こすことは否めないだろう。
- (二)エルヴェシウス(Claude-Adrien Helvetius, 1715-1771)はフランスの啓蒙思想家で、『精神論』『人間論』などの著作で、感覺主義的唯物論を展開した。ダランベール(Jean Le Rond d'Alembert, 1717-83)はフランスの数学者、物理学者で

- あり、デイドロ(Denis Diderot, 1713-84)ともに『百科全書』の責任編集にあたった。なおチュルゴー(Anne-Robert-Jacques Turgot, 1727-1781)はフランスの自由主義的見解を提唱した経済学者であり、政治家。ケネー(François Quesney, 1694-1774)はその弟子として、重農主義的見解を展開した『経済表』を著したフランスの医師であり経済学者。
- (三)フッガー家は、中世から近代にかけてドイツのアウグスブルグで巨大な富を築いた商人の家系。
- (四)ラッサール(Ferdinand Lassalle, 1825-64)はドイツの政治学者であり、労働運動の指導者であるとともに社会主義者。有名なマルクスの『ゴータ綱領批判』が、その標的をラッサールに向けている点でも知られる。著者マーテンセンもキリスト者という点を除けば、ヘーゲル哲学から出発して倫理的社会主義を構想している点で、ラッサールと類似した思想的立場にいる。マーテンセンがしばしば肯定的にラッサールを引用している点で、訳者は両者になんらかの関係があったのではないかと推測してみたい。
- (五)一三世紀以降のイタリアのフィレンツェで発行されたフローリン金貨は、後にヨーロッパ各国で模倣的な通貨発行の発端となり、一四、一五世紀のドイツではグルデン金貨(ライングルデン、帝国グルデンの金貨)となった。
- (六)ミズガルズの大蛇は、北欧神話で人間の住む領域ミズガルズを取り巻く蛇の怪物。
- (七)この部分は独訳では、「アヘンや火酒などのようなもの」となっている。
- (八)モロック(Moloch)は中東で崇拝される神の名であるが、人身御供が行われたことで知られる。
- (九)ウィリアム・ピット(William Pitt, 1759-1806)は通称小ピットといわれ、一八世紀末から一九世紀はじめにイギリス首相の地位にあった。
- (十)独訳では「夕方の授業がしばしば労働疲れ、無気力、気晴らしの欠落状態のなかでなされていた」とする一文が挿入されている。
- (十一)カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)は『英雄崇拜論』『フランス革命史』などの著書を著したイギリスの歴史家、評論家。
- (十二)バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)はイギリスの詩人であり、ラッドイト運動弾圧への抗議者としても知られる。『イギリス詩人とスコットランド批評家』など数多くの作品がある。
- (十三)シュトラウス(David Friedlich Strauß, 1807-74)は『イエスの生涯』を著したヘーゲル左派の思想家、ルナン(Joseph Ernest Renan, 1823-92)は『イエス伝』を著したフランスの宗教史家。
- (十四)マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834)は『人口論』で知られるイギリスの経済学者。

### 第三章

- (一) プラトン(427-347BC.)はソクラテスやアリストテレスと並ぶ古代ギリシアの三大哲学者の一人であり、代表作に『共和国』(邦語では『国家』と訳される)がある。
- (二) トマス・モア(Thomas More, 1478-1535)はイギリスの法律家、宗教家であり、『ユートピア』の著者として知られる思想家。
- (三) フェヌロン(François Fénelon, 1651-1715)はフランスのカトリック大司教にして、神学者、詩人。ルイ十四世を批判した『テレマークの冒険』の著者として知られる。
- (四) シベルン(Frederik Christian Sibbern, 1785-1872)は、F・W・J・シェリングの影響を強く被ったデンマークの哲学者であり、コペンハーゲン大学の教授を務めた。『人間の精神的本性と本質』、『詩情と芸術』、『思弁神学の基礎を保持する思弁的宇宙論』などの著作があるが、未完の書『二一三五年』(Meddelser af Indholdet af et Skrivt fra Aaret 2135, 1853-72)では彼の政治的ユートピアが展開されている。
- (五) 「ヨーロッパ的人間性」とは現代ではなく、近代ヨーロッパ的人間性と理解すべきであろう。しばしば、ゲーテの作品に表現されるファウストなどはヨーロッパ的人間の典型であり、自我を世界の中心としてとらえ、自我と対立する世界や自然を認識し、解明し、克服しようと飽くなき努力を続ける人間である。
- (六) フーリエ(Francois Marie Charles Fourier, 1772-1837)はフランスの社会思想家でF・エンゲルスによってユートピア社会主義者の一人とされた。『四運動の理論』などの著書がある。
- (七) プルードン(Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865)はフランスの社会主義者、無政府主義者。「財産とは盗みである」ということばで知られる『財産とは何か』などの著者がある。
- (八) サン・シモン(Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon, 1760-1825)はフランスの思想家で、ユートピア社会主義者といわれる。『産業者の教理問答』、『新キリスト教』などの著作が残されている。
- (九) 「一八四八年」と一八七一年に現れた『赤い共和国』にはっきりと示されている。一八四八年とはヨーロッパ各地での革命の波を指しているが、その発端は二月にフランスで起こった労働者が主体となる二月革命のことであり、一八七一年の「赤い共和国」とは、パリで民衆が蜂起して誕生したパリ・コミューンを意味する。
- (十) この用語はR・メーアー『第四身分の解放闘争』(第四章、原注⑩)の用法によるものであり、労働者階級が聖職者、貴族、平民(市民)の三階級に次ぐ第四の階級として位置づけられている。したがって、ここでの用法は言論界やジャーナリズムの意味ではない。
- (十一) ミラボー(Honoré Gabriel Riqueti, Comte de Mirabeau, 1749-91)はフランス革命の当初の指導者であり、立憲君主制を主張した。

## 第四章

- (一)『新約聖書』「ルカによる福音書」第十章の七には「労働者がその報いを得るのは当然である」という一文が見られる。
- (二)シュルツェ-デリツシュ(Franz Hermann Schulze-Delitzsch, 1808-83)はドイツの経済学者であり世界初の信用組合の創立者。
- (三)ここで「諸々の欲望」は〈Begjærligheder〉の訳語で主観的、闘争的できりのない悪無限の性格のもの。ここには倫理性が欠落している。
- (四)ミル(John Stuart Mill, 1806-73)はイギリスの功利主義哲学者であり、経済学者。彼の先行者ベンサムが幸福を量的に把握したのにたいして、ミルはその質的側面をとらえ、精神的な快を重視した。
- (五)この引用句は独語訳では「食って飲んで、次の日には死んでいることを許したまえ」とされており、その句を( )内に併記した。
- (六)「国内伝道」は広義には、国内の世俗化された社会での信仰復興運動を意味し、デンマーク・キリスト教諸団体の「国外伝道」と対比される。だが、この概念は狭義には、敬虔主義の流れを継承する保守的な国内伝道の一団体「インドラ・ミッション」(Indre Mission)を指すことばとしても用いられる。とはいえ、ここでマーテンセンは、産業社会化とともに生まれた労働者階級のなかでの信仰復興を念頭においてこの用語を用いているものと思われる。だが、じっさいにその宗教的空白のなかで労働者の組織化に成功したのは、キリスト教であるよりもむしろ社会主義、労働運動であった。

## 訳者紹介

小池 直人(こいけ なおと)。名古屋大学情報科学研究科准教授。社会哲学、北欧社会研究を専攻。主な著書に、『デンマークを探る(改訂版)』(風媒社、二〇〇五年)、『福祉国家デンマークのまちづくり』(西英子との共著、かもがわ出版、二〇〇七年)など、訳書に、H・コック『生活形式の民主主義』(花伝社、二〇〇四年)、コック『グルントヴィ』(風媒社、二〇〇七年)、N・F・S・グルントヴィ『世界における人間』(風媒社、二〇一〇年)、グルントヴィ『生の啓蒙』(風媒社、二〇一一年)などがある。